

---

# ノーテンキな奴ほど何か強い

瑠都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーテンキな奴ほど何か強い

### 【Nコード】

N5516T

### 【作者名】

瑠都

### 【あらすじ】

ひよんなどこから新八と神楽と出会った女、「久琉我<sup>くるが</sup> 七<sup>なな</sup>」は幼い頃、銀時達と出会い攘夷戦争と一緒に戦った事があるという。

七は、居合いと「舞流<sup>ぶりゅう</sup>」という、その名の通り舞い（踊り）ながら戦う小刀の剣の型を使うらしい。

しかも性格は何が起きてても、のん気に笑ってる・・・

そんなこんなで万事屋に住むことになった七と万事屋ファミリーのドタバタコメディーがスタートです！！



## プロローグ（前書き）

初めまして、瑠都です。

駄文ですがよろしく願います。

銀「機械音痴なのに書いてんのかよ……………」  
まああ……………」

## プロローグ

その女、小刀一本で攘夷戦争を駆け抜けた女

女が右手の小刀を振るたび敵が両断される

左手の鞘を振るたび敵がなぎ倒される

女は優雅にステップを踏み、踊り

ながら戦う

この型「舞流」ぶりゅうを知っている者は少ない

黄金の髪を血で飾り

見て皆、女の事を

白い瞳は刀のように鈍く光らせながら舞う姿を

「舞姫」まいひめ

と呼ぶ。

ここは江戸、かぶき町そこに一人の金髪の女が歩いて  
いた。

「ひゃく、ここがかぶき町かあ、ひつろいなあ……」

「

女は一言言った後、スキップしながら人ごみの中へ消  
えていった。

## プロローグ（後書き）

銀「へったくそだなあ・・・」  
・・・  
すいません・・・」

ひったくりをされた女が皆が弱い女とは限らない（前書き）

どうしよう．．．．．

書くスピード遅い．．．．．

ひったくりをされた女が皆が弱い女とは限らない

「いいアルか新八、相手はか弱い女の子にひったくりをするようなクソ野郎ネ。捕まえ

たらボツコボコにして、今までひったくってきた物を万事屋に寄付させるアルよ。」

「いや神楽ちゃん、そしたら僕らが捕まるからね・・・」

かぶき町のビル影で二人の少年と少女あんばんをかじりながらコソコソと話していた。

最初に口を開いたオレンジに近い朱色の髪を綺麗に二つのボンボリにおさめた青い瞳の少女「神楽」は、絶滅寸前の宇宙最強戦闘種族「夜兎<sup>やと</sup>」族だ。

そして、次に口を開いたメガネをかけた茶色がかった髪の少年は「志村 新八」。

なぜ二人がビル影でコソコソやっているのかというと、万事屋に「最近かぶき町ではやっているひったくり犯を捕まえてくれ」という依頼が入ったのだ。

そんなのは警察に頼めばいいのだが、警察は攘夷志士の動きが活発になっている今、受け流すだけで真面目に取り合ってくれないのだ。

だから万事屋に依頼が入ったのだが……

「全然来ないな、ひったくり……」

あんぱんを食べながら張り込んでいるのだが、一向に来ない。

万事屋のオーナーである坂田 銀時は別の所を探してくるといったつきり戻ってこない。おそらく、パチンコにでも行っているのだろう。

「仕方ないアル。こうなったら作戦変更ネ！ひったくりが狙うのは年老いたジジババや可愛い女の子アル。だからこの道を通っている人の中で一番ひったくりされそうな人にマークするアルよ。」

突然神楽が立ち上がった。

「でも神楽ちゃん、こんなたくさんの人の中でどうやってそんな人探すんだよ……」

「簡単ネ。一番目立ってる奴を探すアル。そんなのも分かんないアルか？だからお前はいつまでたっても新七になれないアル、むしろ1ランク下がって新九になった感じネ。」

「なんだよ新九って……っかそんな作戦分かるかあああ  
あ！！！！大体目立つジジババや可愛い女の子って……ジジババはいるかもしれないけど女の子は――」

「新ハイ」

そこまで新八が言った時、神楽が新八の言葉を遮った。視線はある一点を見つめている。

「何？神楽ちゃん？」

「アレ」

「アレ？」

神楽が指差したところを見ると、そこには二十代位の金髪の美女が歩いていた。

黄金に輝く金髪を、ペロペロキャンディー型で先端には可愛いキャンディーの飾りが二

つぶら下がっている珍しい簪で後ろにまとめ、

真っ白な瞳には大人では考えられない輝きがある。

白い百合が描かれた落ち着いた赤紫色の着物は白い肌と金髪を一層際立たせている。

足に履いた厚底の黒い下駄、はリズム良く音を鳴らしていた。

しかもいかにもひったくられそうな黒いバッグを持っている。

たしかに目立っていた。

新八と神樂はしばらく見とれていたがハッ和我に返り、女に話しかけた。

「あつあのゝ・・・」

「ん？何か用？」

子供っぽい、弾んだ声で女は答えた。

「今この辺でひったくりが流行っているアル。だからオネーさんも気を付けるヨロシ。」

神樂が単刀直入に言う。

「へえゝそうなんだ、でも大丈夫・・・。」

ブォン！！

女が大丈夫と言い切る前に、ものすごいスピードで走って来たバイクによってバッグがひったくられた。

「ありっ？」

「ひったくられたあ！！！！言っただそばから・・・」

ダンッ！！！！

女が駆け出した。

そして一人の人にもぶつからず、軽々とバイクを追い抜かすとバイクから10メートルほど離れた信号によじ登り、

「とうっ！！」

「えっ！？」

バイクに乗っている男めがけて飛び蹴りを放った。

ガッシャァン！！！！！！！！

飛び蹴りは見事に男の顔面に決まり、男はバイクごと吹っ飛んだ。

「私のバッグ返して、おにーサン。」

新八と神楽はその光景を口をポカンと開けて見ている事しか出来なかった。



ひったくりをされた女が皆が弱い女とは限らない（後書き）

今の行為はとても危険です絶対に真似しないで下さい・・・

新「真似できるかあああ!!」

・・・・・・誤字脱字があつたら教えて下さい。

人生で必要なのはノリと口喧嘩で強いこと（前書き）

人生で必要なのはノリと口喧嘩で強いこと

「あんだ、名前は？」

「久琉<sup>くるが</sup>我<sup>なな</sup>七」です。仕事と人を探しています。」

ここは、大江戸警察署、そこで新八達は取り調べを受けていた。

「いや名前しか聞いてないけど・・・まあいいや、あんたはこの子達の保護者かい？」

「さっき知り合いましたー。」

七と名乗った女は笑顔で警官の質問に答えてる。

「じゃあ七さん、あんだにはバイクに乗っていた男の顔面を蹴ってバイクを店に突っ込ませて店を壊した容疑がかかってんだけどいいかい。」

ガタツ!!

「待ってください！七さんはその男にひったくりにあつたんです！これは正当防衛です！」

「そうアル！ひったくりするような奴には顔面吹っ飛ばすぐらいが丁度いいネ！」

新八と神楽が反論した。

「だけど店壊しちゃったからねえ、そして君達、万事屋だか何だか知らないけど未成年だろ・・・依頼されたとか言っても駄目だからね。そんなことは警察に任せておけばいいんだよ・・・。」

「その警察があてにならなかったら？」

今度反論したのは七だった。

「ひったくりなんか遭つたらまず警察に行くと思うんだけど・・・  
メガネくん、依頼  
に来た人はなんか言つてた？」

「あ、そういえば警察に言つても真面目に取り合つてくれないみたいな事を言つてました。」

「だってさ、警察サンは真面目に取り合つてくれなかったんだ。どうする？このまま  
訴えてもいいんだけど、取調室から出してくれたら警察がひったくり犯を捕まえたって  
ことでいいし・・・。」

ニタツと意地の悪い笑みを浮かべて聞いた。

警官は困り顔で少し考えた後、取調室のドアを開けた。

「幸い死者も出てないし、店への賠償金はこっちで出しとくから。」

すると七は、こんどはニコツと笑って、

「ありがとうー、警察のおじさん。」

と言つて取調室を出て行つた。

新八と神楽も

「すいません・・・・・・・・。」

「アバヨおっさん。」

と、七に続き取調室を出た。

「いやあゝ助かりましたよ七さん。」

「カッケかったアル！七姉！」

大江戸警察署からの帰り道、新八達は七を真ん中にして歩いていた。

「いやいや助かったのはこっちだよ、えーっと・・・」

「新八です。」「志村 新八」

「わたしはかぶき町の女王、」「神楽」アル！」

「ぱっつあんにグラちゃんね、よろしく。」

「七姉はどこに住んでるアルか？」

「えっとねー・・・」

すると七はあっという顔をして

「ヤバっ・・・今日・・・住むと来ないじゃん・・・」

3秒ほどの沈黙

「えっ？ えええええええええ！ ……！！！！！！住むとこ無  
いってどういう事で

すか七さん……………」

「七姉ホームレスアルか！マイホームだけは無い女、略してマダオアルかあ！！！！」

二人とも一斉に七に詰め寄る。

七はそんな二人を落ち着かせるように、

「だつてかぶき町に来たの今日だし……何とかなるかな？ みたい  
な？」

と言った。

「あんた人生何で生きてんだよ……。」

「ん、ノリ？」

「・・・・・・・・・・。」

新八は返す言葉が無かった。

「そういえばさ、人捜してんだけど捜すの手伝ってくれない？」

いきなり七が切りだしてきた。

「いいアルよ！万事屋グラさんとは私のことネ！！」

ノリのいい神樂が引き受けた。

「そんでね名前は・・・何だっけ？」

ズコッ！！！！

「搜してる奴の名前位覚えとけよ！！！！思わずズッコケちゃったじやねーか！！！」

新八が大声でツッコむ。

「いや待って・・・・・・・・・・何かどうかに銀って付いてたよう  
な・・・・。」

それを聞いた途端、新八と神樂がえっという顔になる。

その時、

「おいおい、張り込みの場所にいなかったと思ったらこんな所に居たのかよ。仕事放棄ですかコノヤロー。」

背後で気だるそうな声が聞こえた。

その声の正体は「万事屋銀ちゃん」のオーナー「坂田 銀時」だった。手にはジャンプの入ったコンビニ袋が握られてある。

その瞬間、七の耳がピクリとなった。

グルンと振り返って、銀時を見るとパツと顔が輝き、

「あ！銀見つけ！久しぶり。」

「ええええええ！！！」

新八と神楽は素で驚く。

ド  
サ  
ツ

しかし、七は元気に手を振るが銀時は目を大きく見開き、ジャンプも地面に落とした。

「銀さん(ちゃん)?」

あまりの銀時の驚き様に、新八と神楽が聞くが、銀時は予想外の言葉を発した。

「何で……お前……ここに……何で……生きているんだ？……」

人生で必要なのはノリと口喧嘩で強いこと（後書き）

なんかお気に入り登録してくれた人がいて……

読んでくれるだけでも嬉しいのに……

あんなに読みにくいのに……

ありがとうございます……！

死んだと思ってた人が生きてたらどんなに嬉しくても一回疑っちゃうよね（前書

ただ今読みやすい書き方を探しています。

だからちよこちよこ変わりますがお許しください（・・・・・）

死んだと思ってた人が生きてたらどんなに嬉しくても一回疑っちゃうよね

「何で……お前……ここにいて？何で……生きて  
いるんだ？」

「……」

「え？どついう事ですか？……」

「銀ちゃん！説明するアル！！」

新八と神楽の声が聞こえてないのか銀時は答えない。

「いやだなあ銀、勝手に殺さないでよ。」

七は右手をヒラヒラさせながら言う。

「だって・・・お前はあん時、背中を切られて・・・」

銀時はまだ信じられないという様に目を見開いている。

「だから生きてるって言うてんじゃん。」

「七姉、背中、切られたアルか？」

神楽が心配そうに七の背中を見る。

「前にちよつとね、」

「いやちよつとじゃねーだろ！！かなりズバツと・・・」

「ストップ！！まず万事屋に帰りましょう！」

「そうアル！！私達よく分かんないネ！万事屋でキツチリ説明するヨロシ

」！

新八と神楽は動揺しまくりの銀時と、その銀時とのんきに話している七を

とりあえず万事屋に連れて帰る事にした。

ゝ万事屋ゝ

「で、銀さんと七さんはどういう関係なんですか？」

「昔しっぽりいった仲アルか？」

「どういつ関係って言っても・・・ねえ銀、」

新八と神楽の質問をかわそうと、銀時に話を振るが、銀時は七の足をまじまじと見て、

「足付いてるよな・・・幽霊ってオチはねえよな・・・」

「・・・何してんの？」

「いや、本当に生きてるんだなって思ってた・・・」

そう銀時が言うと、七はニヤツと笑って、

「私があんな所で死ぬと思ってんの？」

「死んだと思ったから驚いたんじゃないか、」

そして、二人で少し笑ったあと、

「って事で住むところ無いんだけどうしたらいいかな？」

「切りかえ早っ！！てか七さんお金は？」

「ゼロ。ここ何日か何にも食べてないよ。」

「・・・・・・・・。」

すると神楽が、

「ここに住めばいいネ！ねえ銀ちゃん！」

と言った。

「そうですよ銀さん！ちょうど看板娘がいなかった事だし・・・

」

と新八も言うが「看板娘なら私がいるだろうがああああ！！！！

！」と

、神楽にボコられる。

「って言ってるけどどうだ？もちろん従業員として働いてもら  
うが・

・・・」

最後に銀時が聞いた。

「じゃあ・・・お願いしようかな。」

こうして、七が万事屋の一員となった。

死んだと思ってた人が生きてたらどんなに嬉しくても一回疑っちゃうよね（後書

やっと七が万事屋の一員に……………

長かったような短かったような……………

ジジイになってもあだ名で呼び合える友達を作れ（前書き）

ここからは一応原作に沿って行きたいと思います。

もし面白かったら一言でいいので感想くれたら嬉しいです。

書き方がおかしかった2話、直しました！

ジジイになってもあだ名で呼び合える友達を作れ

「俺が以前から買ってた大量のチョコが姿を消した。食べた奴

は正直に手エ挙げろ。今なら四分の三殺して許してやる。」

ある日、銀時が瞳孔開き気味に言った。

「四分の三ってほとんど死んでんじゃないスカ。っていうかア  
ンタ、

いい加減にしないとホント糖尿になりますよ。」

新八は呆れ気味に言葉を返した。

「『またも狙われた大使館。連続爆破テロ凶行続く・・・』物  
騒な世

の中アルな〜私恐いヨ、パピー、マミー。」

「あれっグラちゃん鼻血出てるよ。」

新聞を声に出して読む神楽の鼻からは真っ赤な血がたれていた。

「恐いのはオメーだよ。幸せそーに鼻血たらしやがって、うまかった

か俺のチヨコは？」

「チヨコ食べて鼻血なんてそんなベタな〜。」

「とぼけんなアア！！鼻血から糖分の匂いがプンプンすんぞ！！」

軽く言葉を返す神楽に銀時は怒鳴る。

「バカ言つな。ちよつと鼻クソ深追いしただけヨ。」

「年頃の娘がそんなに深追いするわけねーだろ定年間際の刑事<sup>デカ</sup>がお前は!!」

「おちつきなって銀、たとえばよく分かんなくなってるよ。」

七が銀時をなだめた時

ドガン!!!!

いきなり下の方で地響きがした。

「なんだなんだオイ、」

急いで下を見ると、「スナックお登勢」に一台のバイクが突っ込んでいた。

「事故か・・・」

「くらああああ！！！！」

怒鳴り声とともに「スナックお登勢」の女主人、「お登勢」が  
店から

出てきた。

「ワレエエエエ！！人の店に何してくれとんじゃアア！！！！

！死ぬ

覚悟できてんだろーな！！」

「ス・・・スイマセン、昨日からあんまり寝てなかったもんで・  
・・・」

バイクに乗っていた男は弁解しながら謝ったが、

「よっしゃ！！！！永遠に眠らしたらアア！！！！」

と、お登勢には通じない。

そこに新八達が止めに入った。

「お登勢さん、怪我人相手にそんな!!」

七はその間に男を見て、

「ありゃりゃ、こらひどいや。グラちゃん、救急車呼んで。」

と言ったが、

「救急車ヤアアア!!」

「誰がそんな原始的な呼び方しろったよ。」

超原始的な呼び方をした神楽に銀時が地面にばらまかれた手紙  
や小包

を見ながら言った。

「飛脚かアンタ。届け物エライことになってんぞ。」

そう銀時が言うと、傷だらけの飛脚らしき男が苦しそうに起き  
上がり、

「こ……これ……これを……俺の代わりに届けてくださ  
い……

……お願い……なんか大事な届け物らしくて、届け損な  
ったら

俺……クビになっちゃうかも……お願いしまっ……」

「おいっ!-!」

言いたいことだけ言うと、そのまま気を失ってしまった。



ジジイになってもあだ名で呼び合える友達を作れ（後書き）

意味分かんところで終わった・・・

ジジイになったもババアになってもあだ名で呼び合える友達を作れ（前書き）

七の出番を増やしたいけど増やしすぎると原作のキャラが・・・

ああゝ

ジジイになったもババアになってもあだ名で呼び合える友達を作れ

「ここであってんだろうな。」

「うん。」

銀時達は飛脚らしき男に頼まれた届け物を届けにある建物まで来ていた。

「大使館・・・これ戌威星の大使館ですよ。」

「戌威族つつつたら地球に最初に来た天人だよな。」

「そう、江戸城に大砲ブチ込んで無理矢理開国させちゃったお

つかない奴らだよ。」

そう銀時達が話していると、

「おい、」

背後から声をかけられた。

振り向くと、今にも襲い掛かってきそうな目でこちらを睨む、2メートル半位の二足歩行の犬が立っていた。

「こんな所で何やってんだてめーら、食われてーのかああ？」

「いや・・・僕ら届け物頼まれただけで。」

「オラ、神楽早く渡っ・・・」

銀時が神楽に言うが、

「チツチツチツおいでワンちゃん酢昆布あげるヨ。」

スパン！！

「届け物がくるなんて聞いてねーな。最近はただでさえ爆弾テロ警戒して厳戒態勢なんだ、帰れ。」

犬がギロリと睨む。

「そんなんなら星に帰ればいいのに。」

「ああ！？」

七がボソツと言った言葉に犬が反応する。

「オイ、今なんつったその女？」  
アマ

「ちょっと七さん！危ないですよ！！」

新八が止めるが七は引き下がらない。

「だからあ、そんなに厳戒態勢なんて敷くんだったら帰った方がいいんじゃないって言ってるの、ワンちゃん。」

「なんだとコラ！！」

自分より一メートル位高い犬とメンチ切りあっている。

「止める七。」

すると銀時が止めた。

「ドッグフードかもしんねーぞ、もらっとけ。」

「そんなもん食うか。」

犬は銀時から差し出された小包を払う。宙を舞った小包は大使館の門の中に着地した瞬間、

ドッガン！！！！

派手な音を立てて爆発した。爆風で全員の髪が逆立つ。

「・・・なんかよくわかんねーけど、するべきことはよくわかるよ。・・・逃げろオオ！！！！」

銀時の声を合図に全員が大使館と逆方向に走り出した。

「待てエエ!!! テロリストオオ!!!!!!」

犬が新八の腕をつかむ。その新八が銀時の腕をつかみ銀時が神楽の腕をつかみ神楽が七の腕をつかんだ。

「新ハイイイ!!! てめっどーゆーつもりだ離しやがれっ!」

「嫌だ!!! 一人で捕まるのは!!!」

「俺のことは構わず行け・・・とか言えねーのかお前、」

「私に構わず逝って二人とも!!」

「そうだよ！私なんかまだなん話も出てないんだから・・・」

「ふざけんな!!お前らも道連れだ!!」

そう言ってる間に犬がたくさん集まって来た。

「ぬわあああ!!ワン公一杯来た!!!!」

その時、

「手間のかかる奴だ。」

門の前に座っていた坊主の様な長髪の男が飛んだ。

そのまま犬を踏みつけながら長髪の男はこちらに向かって来る。

「!!」

シャラン

「逃げるぞ銀時。」

「「ッラ小太郎!!」」

ゴッ！！

「ツラじゃない桂だア！！！！」

桂と名乗った男のアップパーカットが銀時に決まる。

「てっ・・・てめっ久しぶりに会ったのにアップパーカットはな  
いん

じゃないの！？てかお前何で俺にだけやって七にはアップパーカ  
ット

しないんだよ！？」

「そのニックネームで呼ぶのは止めると何度も言ったはずだ！  
！時

に銀時、お前、七の墓で何かしたか？そこに七の亡霊がいるぞ。

「

「おーいヅラ、私は生きてるよ。」

七が言うと、桂は銀時とまったく同じ反応をした。

「生きているだと・・・どついう事だ、七!？」

「話は後だよヅラ、今は後ろ!！」

七の指差した所を見ると、もう犬が追っかけて来た。

「チツ、こつちだ！行くぞ！！」

そう桂を先頭に逃げる一向をビルの中から双眼鏡で見ていた者がいた。

「とうとう尻尾だしやがった……山崎、何としても奴らの

拠点おさえてこい。」

「はいよつ。」

スパンと障子と閉まる音がして山崎と呼ばれた男が出て行った。

双眼鏡で見ていた男は双眼鏡を外して吸っていた煙草をスパアと吐

いた。そして紙を見る紙には『攘夷派過激浪士桂小太郎、この顔に

ピンと来たら110番』と書いてあった。

「天人との戦で活躍したかつての英雄も、天人様様の今の世の中じ

やただの反乱分子か・・・このご時世に天人追い出そうなんざ、た

いした夢想家だよ、」

そしてその紙をクシャクシャに丸めると、そばにアイマスクをして

寝ている栗色の髪の少年にぶつけた。

「オイ、沖田起きろ。」

すると、沖田と呼ばれた少年がムクツと起き上がった。

「爆音って・・・またテロ防げなかったんですかい？何やってんだ

イ土方さん真面目に働けよ。」

「もう一回眠るかコラ、」

土方と呼ばれた男が言う。

「天人の館がいくらフツ飛ばうがしたこっちゃねえよ、連中泳が

して雁首揃ったところをまとめて叩き斬ってやる。」

抜いた刀に土方の瞳孔開き気味の目の顔が映る。

「真選組の晴れ舞台だぜ、楽しい喧嘩になりそうだ。」

真選組副長土方十四郎が呟いた。

ジジイになったもババアになってもあだ名で呼び合える友達を作れ（後書き）

こんな駄作を読んでくださってる皆様、

更信遅れてスイマセエエエン！！！！！！

5話目直しました。

ジジイになってもババアになってもあの世へ行ってもあだ名で呼び合える友達を

・・・やっと更信できたぁ・・・

ジジイになってもババアになってもあの世へ行ってもあだ名で呼び合える友達を

『——に続き今回卑劣なテロに狙われた戌威星大使館。幸い死傷者は

出ていませんが・・・え・・・あつ、新しい情報が入りました。

監視

カメラにテロリストと思われる一味が映っているとの・・・あゝ  
バツ

チリ映っていますね。』

「バツチリ映っちゃってますよ、どーしよ姉上に殺される。」

「すっごーい!!!ホントに映ってるよ!」

「テレビ出演。実家に電話しなきゃ。」

テレビ画面に映っている自分たちを見て焦る新八と、のん気にテレビ

に映った事に喜ぶ七と神楽。

ここはホテル「HOTEL ? KEDAYA」

ここに桂は銀時達をかくまってくれているのだ。

「何かの陰謀ですかねこりゃ、なんで僕らがこんな目に・・・唯  
一、  
桂さんに会えたのが不幸中の幸いでしたよ。」

新八が寝っ転がっている銀時に言う。

「こんな状態の僕らかくまってくれるなんて、銀さんと七さんの  
知り

合いなんですよ？一体どーゆー人なんですか？」

「ん——テロリスト。」

「はい!？」

二人の意外な言葉に驚く新八。すると、襖がス——つと開い  
た。

「そんな言い方は止せ。」

桂が手下を八人ほど連れて入って来た。

「『この国を汚す害虫“天人”を討ち払い、もう一度侍の国を立て直す。』我々が行うは国を護るがための攘夷だ。卑劣なテロなどと一緒にするな。」

「攘夷志士だって!？」

「なんじゃそら。」

神楽が聞く。

「攘夷とは二十年前の天人襲来の際に起きた外来人を排そうとする思想で、高圧的に開国を迫ってきた天人に危機感を感じた侍は、彼らを江戸から追い払おうと一斉蜂起して戦ったんだ。」

でも天人の強大な力を見て弱腰になった幕府は、侍達を置き去りに勝

手に天人と不平等な条約を締結。  
幕府の中枢を握った天人は侍達から刀を奪い彼等を無力化したん

だ。

その後、主だった攘夷志士は大量粛清されたってきいたけど……  
ま

だ残っていたなんて。」

新八が説明する。すると銀時が、

「……どうやら俺達ア踊らされたらしいな。」

七も、

「そうだね、ねえ飛脚のおにーサン、」

と言った。すると、桂の後ろからスナックお登勢に突っ込んだ男  
が、  
すまなそうに出てきた。

「全部てめーの仕業か、桂。最近世を騒がすテロも、今回のこと

も。  
」

銀時が言う。チャカ、桂が刀を外す。そして、

「たとえ汚い手を使おうとも手に入れたいものがあつたのさ・・・

・  
・銀時、七、この腐った国を立て直すため、再び俺と共に剣をとら

んか。白夜叉と舞姫と恐れられたお前らの力再び貸してくれ。」

ジジイになってもババアになってもあの世へ行ってもあだ名で呼び合える友達を  
遅くなってスイマセン・・・

お前らテロなんてやってる暇があるならペロの散歩にでも行ってきた あっ、っ

お気に入り登録をしてくれた人が二人目！！

ありがとうございます！！

それで・・・皆様に相談なのですが・・・

残酷描写ってどこからが残酷描写なんでしょうか？

例えば、肩を斬られました。血が吹き出ます。これは残酷描写なの  
でしょうか？

それとも、ブシャアアアア！！とかドシャアアアア！！というのが  
残酷描写なのでしょうか？

それとも、精神的なものなのでしょうか？

それとも、・・・・・・・・そんな事を考えていると埒が明かないので  
皆様に相談したかぎりでございます。

誰かこんな私を助けてくれる心の優しい方がおりましたら教えてく  
ださい。

感想の方で受け付けています。

お前らテロなんてやってる暇があるならペロの散歩にでも行ってきた あっ、っ

「……………これまでか……敵の手にかかるより最後は武士らしく、潔く腹を切ろう。」

ここは戦場。そこに、桂、銀時、七が天人に囲まれていた。

「バカ言ってるんじゃないよヅラ、そんなだからヅラになるんだよ  
ヅラは、」

71

桂の言葉に七がのん気に言う。

「そうだぜ、美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか。」

銀時は刀を構える。

「行くぜ（よ）ッラ、」

「何度言えば分かる、ッラじゃない桂だ。」

そう言って、三人は天人に向かって斬りかかっていった。

その男、銀色の髪に血を浴び、

戦場を駆る姿はまさしく夜叉。

その女、黄金の髪を血で飾り、

戦場を舞う姿はまさしく姫。

「天人との戦において鬼神の如き働きをやったのけ、敵はおるか味方からも恐れられた武神・・・「坂田銀時」、「久琉我七」、我らと共に

再び天人と戦おうではないか。」

「……………銀さん、七さん、アンタ達、攘夷戦争に参加してたんですか……………」

新八が目を丸くする。

「七は戦死したと思っていたが生きている様だし、銀時は戦が終わると共に姿を消したかな。お前達の考える事は昔からよく分かってるん。」

「俺ア派手な喧嘩は好きだがテロだのなんだの陰気くせーのは嫌いな。」

「私もパス、面白くなさそうじゃん、それ。」

七もつまんなそうに首を横に振った。

「俺たちの戦はもう終わったんだよ。それをいつまでもネチネチネチネチ姑かお前は！」

「バカか貴様は！姑だけではなく女子はみんなネチネチしている。そういう全てを含めて包みこむ度胸がないから貴様はもてないんだ。」

「バカヤロー、俺がもし天然パーマじゃなかったらモテモテだぞ多分。」

「何でも天然パーマのせいにして自己を保っているのか、哀しい男だ。」

「哀しくなんかないわ、人はコンプレックスをバネにしてより高みを・・・」

「アンタら何の話してんのー!!」

「俺たちの戦はまだ終わってなどいない。貴様達の中にもまだ残っているよう銀時、七・・・国を憂い共に戦った同志達の命を奪っていった、幕府と天人に対する怨嗟の念が・・・天人を掃討しこの腐った国を立て直す。我ら生き残った者が死んでいった奴等にしてやれるのはそれぐらいだろう。我らの次なる攘夷の標的はターミナル。天人を召喚するあの忌まわしき塔を破壊し奴等を江戸から殲滅する。」

だがアレは世界の要・・・容易におちまい。お前たちの力がある、銀時、七。既に我々に加担したお前達に断る道はないぞ、・・・特に銀時、貴様にはあの事について責任を感じておりよう。」

そう桂が言った瞬間、銀時が目を見開いた。七もさっきまでへらへら笑っていたが、真顔になる。

「銀さん？七さん？・・・」

その時、

バン！！！！

突然襖が蹴破られ黒服の男達がずらずらと入って来た。その中には土方や沖田もいた。

「御用改めである！！神妙にしるテロリストども！！」

土方が怒鳴った。

「しっ……真選組だアっ!!」

「イカン逃げろ!!」

桂の声を合図に銀時達が逃げる。

「一人残らず討ちとれエエ!!」

真選組も追う。

「なななななんですかあの人ら!？」

逃げる途中、新八が聞いた。

「武装警察「真選組」反乱分子を即時処分する対テロ用特殊部隊だ  
厄介なのにつかまったな、どうしますボス。」

「だーれがボスだ!!お前が一番厄介なんだよ!!」

「ヅラ、ボスなら私に任せるヨロシ。善行でも悪行でもやるからに  
は大将やるのが私のモットーよ。」

「オメーは黙ってる!!何その戦国大名みたいなモットー!」

「オイ。」

後ろから声がかけられた銀時が振り向くと、刀が向かって来た。下に避ける銀時。

「ぬを!!」

刀を向けたのは土方だった。

「逃げるこたアねーだろ。せつかくの喧嘩だ楽しもうや。」

「オイオイ、おめーホントに役人か。よく面接通ったな瞳孔開いてんぞ。」

「人のこと言えた義理かてめー! 死んだ魚のよーな瞳<sup>め</sup>しやがって!!」

「いいんだよ、いざという時はキラめくから。」

そんなやり取りをしていると、

「土方さん危ないですぜ。」

ドッゴン!!

声とともにバズーカが撃たれた。

「うおわアア!!」

「生きてやすか土方さん。」

バズーカを撃ったのは沖田だった。

「バカヤローおつ死ぬところだったぜ!!」

「チッ、しくじったか。」

「しくじったって何だ!!オイッ!こっち見るオイッ!!」

だがバズーカの煙が晴れても、そこに銀時の姿はなかった。

「副長、いいです。」

部下の一人が桂達が隠れている部屋の襖を指差した。

「オイッ出てきやがれ！無駄な抵抗は止めな！ここは十五階だ！逃げ場なんてどこにもないんだよ！！」

土方が怒鳴る。すると、桂は懷から丸い物を取り出した。

「？そりゃ何のまねだ、」

銀時が聞いた。

「時限爆弾だ。ターミナル爆破のために用意していたんだが仕方あるまい。コイツを奴らにおみまいする・・・そのスキに皆逃げろ。」

ガッ！

そう桂が言った時、今まで黙って見ていた七が桂の腕を掴んだ。

ゴト、桂の手から時限爆弾が落ちる。

「貴様ア！桂さんに何をするかアア！！」

そう言われても七は桂の腕を放そうとしない。むしろさつきより力を強く握んだ。ギシギシと桂の腕が音を立てる。

「……ツラアもうやめにしよう。アンタがどんだけ手エ汚そうと、死んでいった仲間は喜ばないし時代も変わんない。おかしいことを考えたってどうにもならないよ。」

と言って七はへらっと笑った。だが桂は、

「おかしいのは貴様だろう、七。大体貴様はいつもそうだ、戦の時までへらへらとして……武士たるもの一度やると決めたものにはまじめに取り組、己の信じた一念を貫き通すものだ。」

と七を睨む。すると七は、

「そんな誰かが決めた武士道貫いてどうすんの、貫いたってまた誰かが死ぬ。ターミナルを爆破させたらいたい何人死ぬと思う？私  
は誰かが犠牲になる武士道なんて貫かない。私は私が決めた武士道  
を貫き、誰も犠牲にはさせない。護りながら生きる。」

白い瞳を鈍く光らせながら言った。

「……………どーしょ……………」

重い空気は神楽の一言によって打ち碎かれた。

「コレ・・・いじくってたら、スイッチ押しちゃったヨ。」

神楽の手にはさっき桂が落とした時限爆弾が握られてあった。モニターの緑の数字がピッピッという音とともに減っていつている。

襖の外、そこでは十数人の真選組の隊員が部屋に向かってバズーカを構えて桂達が出てくるのを待っていた。

「オーイ出てこーい。マジで撃っちゃうぞ。」

「土方さん、夕方のドラマの再放送始まっちゃいますぜ。」

沖田が呟いた。

「やべエ、ビデオ予約すんの忘れてた。さっさと済まそう発射用意!」

とても勝手な理由でバズーカを撃とうとした時、

ドッゴォォン！！

突然襖が蹴破られ、銀時、七、新八、神楽が出てきた。

「なっ・・・何やってんだ止めるオオ！！」

土方が言うが、

「止めるならこの爆弾止めてくれエ！！爆弾処理班とかさ・・・なんかいるだろオイ！！」

「おわアアア！！爆弾もってんぞコイツ！！」

「ちよつ、待てオイいいい！！」

隊員達は銀時達とは逆方向に逃げ出した。

「げっ！！あと6秒しかねエ！！」

「銀さん！窓、窓！！」

新八が窓を指差すが、

「無理！！もう死ぬ！！」

と言っていると七が、

「グラちゃん!!」

「分かったアル! 銀ちゃん、歯アくいしばるネ。」

神楽が傘を構える。そして、

「ほあちゃアアアア!!」

爆弾を持っている銀時ごと傘で窓に向かってぶっ飛ばした。

「ぬわアアアア!!」

ガッシャーン!!

3

「ふんぐつ!」

ブォン!

2

銀時は落ちながら爆弾を上に向かって投げた。

1

0

ドッガン！！！！！

爆弾は空中で爆発した。

「ありや、これ銀死んだんじゃない？」

「ぎっ……銀さん！！」

「銀ちゃんさようなら！！」

窓際で見ていた七達が銀時に別れの言葉を言っている時、桂は屋上にいた。

『美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか。』

桂は銀時の言った言葉を思い出し、

「フン、美しい生き方だと？アレのどこが美しいんだか。」

デパートの吊り下げられている旗に？まり青ざめた顔で下を見ている銀時を見ながら言った。

『私は私が決めた武士道を貫き、誰も犠牲にはさせない。護りながら生きる。』

今度は七の言葉を思い出し、

「……だが昔の友人が変わらずにいるというのも、悪くないものだ……」

そう言って用意されていたヘリコプターに乗り込んだ。

お前らテロなんてやってる暇があるならペロの散歩にでも行ってきな あっ、

銀さんスイマセン・・・・・・・・あの名台詞ウチの七がとってしまっ  
て・・・・

ストーカーは大体自分がストーカーだって認めない（前書き）

更信遅れてスイマセン!!

→（コイツ謝ってばっかだな）

言い訳は後書きで（<―>）

それと、話がとびます。

これは銀さんがゴリラストーカー（近藤）をド汚い手で倒した後の話です。

ストーカーは大体自分がストーカーだって認めない

～志村家～

「ありがとうね七ちゃん。家まで送ってくれて、」

「いって、どうせこのゴリラストーカーを動物園・・・じゃなく奉行所

に連れて行かなきゃいけないから、」

門の前で妙と七が立ち話をしている。七は気絶してグルグルに縛られている

近藤の襟首を掴んで引きずっている。

「新ちゃんに新しい従業員が入って立つて言うからどんな娘かと思つたらこんなに若い娘だったなんて・・・」

妙が言つと、七は首をかしげて、

「・・・妙ちゃん、私のこと何歳だと思つてゐる？」

「え・・・16、17歳位かしら？」

そう妙が答えると、

「妙ちゃん・・・私・・・20代前半・・・」

七はガツクリと項垂れて言つた。

「そうなの！？私はてっきりまだ１０代だと・・・」

妙が驚いていると七が、

「私ってそんなに幼く見える？」

「ええ、何か幼く見えるのよね。」

妙が首をかしげる。

「・・・やっぱり・・・まっいいや、それじゃあ私もう行くから、じゃー  
ね。」

そう言ってブンブンと手を振り歩いていく七。妙は七に手を振り

ながら、

「フフフッあーいうところが幼いんじゃないかしら・・・」

と、呟いた。

「チヨメ公なんざクソくらえー!!」

七が上機嫌で歌っている。

「ちよっ痛い!痛い!」

気絶していた近藤が目を覚ました。

「お嬢さん、俺を何処に連れて行くんだ！」

「動物園・・・じゃなくて奉行所！」

「動物園って言った！？今動物園って言ったよね！！」

近藤がツッコむが、

「うるさいな、あんまり騒ぐと川に突き落とす・・・じゃなくてホントに奉

行所連れてくよ。」

「ふざけるな！！なんで俺が奉行所なんて連れて行かれないやい  
けないんだ

！俺が何をしたって言うんだ！！」

「ストーカー。」

七は近藤を冷たくあしらう。

「俺はストーカーなんてしていない！！フラれてもめげないでし  
つこく付きま

とってただけだ！！」

近藤の言葉を聞き、七は、

「自分のやった事も分かんないゴリラは社会的に必要ないよね、」

と、近くの川に近藤を投げようとする。

「待て待て待て！！！！すいませんっ！！奉行所だけは勘弁してください！！お礼はしますからここに連れて行ってください！！！！」

近藤はグルグルに縛られた手で袖から地図を出した。地図に赤丸で囲まれてい  
る場所は「真選組」と書かれてあった。

ストーカーは大体自分がストーカーだって認めない（後書き）

言い訳をします。

私は二日間修学旅行に行ってきました。

そして家に帰ると、熱が38.5度ありました。

ギヤアアアア！！ですよ、二日間寝込みました。

そんなこんなで更信が遅れました。（；ーー）

100人に一人は真選組のことをまえらぐみと言う（前書き）

私ってテンション低いですかね？

銀「知るかボケ。」

・・・ハハハ（・・）

あらすじ

七は近藤に頼まれ、真選組に向かうのだあった。

新「簡単過ぎだろ！！！！！！」

100人に一人は真選組のことをまえらぐみと言う

「えーっと・・・コレ何て読むんだろう・・・」

七は「真選組屯所」と書かれた看板的な物を見て呟いた。

「しんせんぐみだって！」

近藤が言っが無視。

「え？まえらぐみ？何だろ？・・・まっいいや・・・」

と言ってから七は大きく息を吸い込むと、

「すみません！！まえらぐみってここですかア！！！！！」

と大声で言った。

「だからしんせんぐみだって言ってんじゃん！！！」

近藤のツッコミは又も無視された。

「いや、それにしても昨日の攘夷浪士の大量検挙はすごかったなあ。」

真選組監察、「山崎退」やまざきひがるがそんな事を呟いていると、外から大声がした。

「スミマセーン！！まえらぐみってここですかア！！」

その言葉に、山崎はズッコケそうになった。

「バカなの！？たしかにそうも読めるけど・・・」

と言って半分呆れながら門を開けた。だがそこにいたのは山崎が考えたバカではなく、

「まあらくみってここですか？」

バカを8対2で消す程の金髪の美女だった。

「あ、いえ「しんせんぐみ」って読むんですけど何か用で？」

そう山崎が聞くと、

「おいザキ助けてくれ！」

と声がした。そして七の引きずってきたものを見ると、

「何やってるんですか？近藤局長、」

と冷たい言葉を真選組局長「近藤勲」に放った。

「で、うちの局長が若い女にストーカーをしていたと。」

「そーゆー事です。」

屯所の客間。そのテーブルに土方と七が向かい合うように座っている。近藤は土方の隣に座っている。

それを襖の隙間から覗いている沖田を中心とした隊士達。

『何でイあのパツキン美人』

沖田が小声で聞いた。

『はい、なんでも近藤局長が女にストーカーしたと言ってきて・・  
』

『へえー・・・』

『何のん気に言ってるんですか沖田隊長・・・』

そう話していると、先ほどまで七と話していた土方が立ち上がり部屋を出て行った。

そして帰ってくると手に黄色い物体が乗った井ぶりを持って来て割りばしとともに七の前に置いた。

「・・・・・・・・何コレ？」

「「カツ井土方スペシャル」だ。今回の件はすまなかった。これで手エ打ってくんねエが、」

（（打てるワケねーだろオオオオ！！！！むしろその気持ちわりイモンひっこめてくれた方が喜んで手エ打つわ！！））

隊士全員が心の中でそう思った。

『あんなモンでどうにかなると思ってんのか土方死ねコノヤロー。』

『

沖田も小声で呟いた。だが、

グッシャグッシャ

「別にもうストーカーやらないって言うんだったら良いんだけどね、おおー！これ結構おいしいね！でも何かマヨネーズ多くない？」

（（食ってるウウウウ！！！！「犬の餌スペシャル」何のためら

いもなく食ってるウウ）

『マヨネーズ鼻に詰まって死ね土方コノヤロー』

「マヨネーズがいっぱい入っているのが土方スペシャルの特徴だ。

」

（（特徴っつーか特徴そこしかねーだろオオ！！））

「へえー、すごいね。でももうちょっと別な調味料加えたらもっと美味しくなるんじゃない？」

七は土方スペシャルを美味しそうにほうばる。

「そうか・・・なんだかお前とは気が合いそうだ。」

土方は納得したように頷くと、

「私もだよ副長サン、」

七もニコツと笑った。

（（味覚バカ二人に妙な友情がアアアア！！もっちゃってらんねー  
よ！！！！！！））

ドッガァン！！！！！！

隊士達が呆れかえった時、突然大きな音がして、一人の隊士が部屋に転がり込んで来た。

「大変です！！昨日検挙した攘夷浪士達の仲間と思う奴等が仲間の釈放を求めて攻め込んで来ました！！」

外に出てみると殺気立った攘夷浪士が2、30人いた。

「真選組イ！！我らの仲間を解放しろ！！貴様ら幕府の犬が我らを捕まえるなんぞ百年早いわア！！」

「おうおう、うるせー奴らがワラワラと・・・」

すると、七が懷から小刀を出し前に出た。

「・・・何の真似だ？」

土方が聞くと、

「土方スペシャルのお礼をしようと思ってさー、」

とニコツと笑った。

「一般人を巻き込むわけにはいかない。下がれ。」

「まあまあ、いいじゃあねえですか土方さん。」

土方の言葉を遮って沖田は言った。そして七の方を向き、

「おいネーちゃん、それなりに剣はできるんだろっねエ。」

と、ニヤツと笑った。

「できなかったら言わないよ。」

と、七もニヤリと笑った。

「おい総悟！！」

「だってあの女、近藤さんを縛って連れて来たんですけど、どんだけ強いのか見てみたいじゃねエ  
ですかイ。」

本当に倒したのは銀時でしかもド汚い手で殺<sup>ヤ</sup>つたのだが沖田はそう言う。

カッン、カッン、厚底の下駄の乾いた音が鳴り、七は攘夷浪士達の前まで歩いた。

「何だ貴様は？幕府の犬か？」

攘夷浪士の一人が聞く。それに七は首を横に振り、

「いいや、ただの通りすがりの侍だよ。」

とのん気に言った。

「フン、そんな小さな刀で侍だと？笑わせるな、だが我らに刃向  
おうものなら女だろうと容赦  
はせぬぞ！！」

攘夷浪士は鼻で笑うと、

ジャキーン

仲間に合図をし、攘夷浪士全員が刀を抜いた。

シャキン

七も刀を抜く。

「久琉我七でござえます。私の舞い<sup>おどり</sup>皆様の命の灯が消える前にしかとその目に焼  
き付けてくださいませ。」

く10分後く

攘夷浪士は全員倒れ七だけが立っていたが、血を流す者はいなかった。



100人に一人は真選組のことをまえらぐみと言う（後書き）

七の最後の言葉……うーん……

新キャラはインパクト！！（前書き）

銀「あんのクソガキイイイ！！！！」

新「どっ、どうしたんですか銀さん！」

銀「バカ作者が原作沿いとか言ってたのに何事も無かった様に原作沿いつていうのを消しやがった！！」

新「じゃ、じゃあこれからはオリジナル的なことになるんですか！？」

銀「そうだな。」

新「クソガキイイイ！！！！アイツどんだけ根性ねえんだ！！一度決めたことぐらいキツチリやり通せや！！」

銀「なんでも新キャラも出したいし過去編もやりたいなとか思ってたアレ？原作沿いじゃなくね？みたいな、」

新「みたいな、じゃねエエ！！なめてんの？」

銀「だからあつちに神楽をやった。」

新「え………やったって？」

銀「正確には殺りに行かせたって感じ？」

ギィヤアアア！！！！！

ボゴツドガツバキツ！！

銀「と言う訳で後書きでは「読者をなめてんのかアア！！作者血祭り際」やるぞ。」

新キャラはインパクト!!

誰もいない路地、街灯が無くても今日は満月なので真っ暗ではない。その満月に照ら

されて二人の人影が逃げるように走っていた。

「アツアニキまだ追ってきます!」

一人の男がヒーヒー言いながら後ろを見る。

「まったく何なんだ!? いきなりこんなもんが飛んできて……」

もう一人の男が握っていた手を開くと銀色に光る針のようなものが満月に照らされた。

その時、

ダダダダン！！

拳銃のような音がして、4、5本飛んできた。

「ヒイツ！！」

男達がそう叫んだ時にはもう針は男達の服を建物の壁にはりつけていた。

「おいおんしら、そんなすぐ逃げるなやちよつと道を聞いただけじゃろが、」

カツカツと靴の音がして人影が月の光の元へ出てきた。網笠を被っているのでよく分

からないが背が小さくて声もまだ幼い。少年のような男は拳銃をクルクル回して腰

のベルトに収めるとと土佐弁で、

「「万事屋銀ちゃん」って知ってる？」

と聞いた。

## 新キャラはインパクト！！（後書き）

って事で新キャラ編の初めみたいな話でしたボラッ！！

神「何が新キャラ編アルか？前書き読み返してこいカス。」

ハイ、ホントすいませんでした・・・

銀「お前のすいませんはもう聞き飽きたんだよ！そしてまた原作沿いに戻るってことはねえだろうな、」

それに関しては大丈夫です。パソコンに誓います！！

新「パソコンに誓うって何だよ・・・じゃあ改めてエ・・・・・・・・」

えっ？改めてって？

全「読者をなめてんのかアア！！作者血祭り際」！！！！！！」

ギイヤアアア！！！！！！

インパクトって言うけどどんな感じ？（前書き）

と言うわけで新キャラ編「玲翔編」スタートです!!

インパクトって言うけどどんな感じ？

「ヒマアル〜ヒマヒマヒマ〜」

万事屋のソファをゴロゴロと寝返る神楽。

「そんなに暇だったら仕事でも探してこい。」

銀時は神楽をシッシツと外に追いやろうとする。

「いやアル。そんなん駄眼鏡に任せればいいアルよ。」

「駄眼鏡って何だコラあ！」

神楽の言葉に反応した新八が怒鳴る。

七はそんな3人を見てクスツと笑うと、

「グラちゃん、そういえば「渡る世間は鬼しかいねエチクシヨ」  
って何時からだっけ、」

と、定春のノミ取りをしながら言った。

「あああああああ！！忘れてたアル！」

その言葉を聞いた瞬間、神楽が大声を上げてテレビのボタンを押す。

だがチャンネルを合わせた時にはもうエンディングが終わり、ニュースがやっていた。

「終わっちゃった・・・」

一人頂垂れる神楽をよそに3人はニュースを見る。

『次のニュースです。二人組の男性が銃を持った少年に脅される事件がありました。』

「へえー、世の中物騒になってきましたね、」

新八がお茶をすする。

『少年は発砲しましたが幸い男性には当たらずけがはありませんでした。しかも少年は脅す

というより道を聞き、そのまま去って行ったそうです。』

「銃突きつけて道聞くてどんだけシャイボーイ？」

「いやそんなこと言ってる場合じゃないですよ。」

のん気な七にツツコム新八。

『少年の持っていた銃は特殊で弾丸ではなく針が出てきたといいます。』

その言葉に銀時と七が驚いたように目を見開きテレビを見る。

『ビルの監視カメラがとらえた映像がこちらです。』

パツと画面が変わりテレビに黒髪の少年が映し出された。そのを見た瞬間銀時と七は立ち上がり、

「七。」

「多分。」

と、短い言葉を交わし玄関を出ていく。

「ちょっと！二人ともどこ行くんですか！？」

「多分テレビ局に殴り込みに行くアルよ！渡る世間は鬼しかいね  
エチクショーもう一回放送  
しろやゴラァー！！」

「いや違うと思う！」

と言いながら新八たちも二人の後を追う。

「ワン！」

その様子を定春は吠えながら見送った。

「と言つ訳で道を教えてほしいんじゃが、」

真選組客間、そこに近藤と黒髪の少年が向かい合つて座っており、その横に土方、

沖田が壁にもたれかかっている。



インパクトって言うけどどんな感じ？（後書き）

ごめんなさい時間がないので切ります。次回は長くする予定です。

感想お願いします。

小説で他のキャラと違っていてことが一発でわかるのって口調じゃね？（前書き）

久しぶりに自分の小説を読み返してたら自分の文章を作る能力の無さにびっくりしました。

そして思った事、

アレっこういうことを活動報告で書けばいいのかな？

小説で他のキャラと違っていてことが一発でわかるのって口調じゃね？

『おいトシ・・・あれって・・・』

『ああ、今日テレビに出てた奴だ。』

『わざわざ警察まで何の用ですかねィ・・・』

3人がちょんまげ風にむすんだ黒髪で土佐弁、そんなでもって全身  
青装束の少年に聞

こえないようにコソコソしゃべっていると、

「だから道を聞いてると言ってるじゃろ。」

いつの間にか少年が話に入ってきた。

「「「!」」」

3人は思わずズザザッと後さずった。

『土方さん、コイツ気配もなしに俺たちの背後にまわりましたぜ  
イ。昨日のこと聞  
いてみてくださいエ』

『よしっトシ、聞いてこいピストル持ってるのか聞いてこい!!』

土方に沖田がと近藤が耳打ちする。

『なんで俺なんだよ!』

2人のムチャぶりに少しキレ気味になりながら土方は、

「オイボウズ、昨日発砲しただろ。」

と、聞いた。土方は正直、昨日の事件のことはまだ半信半疑だった。こんな世の中

でこんな少年が銃を持っているはずがない。

しかし少年は、

「昨日・・・ああ、いきなり逃げるもんじゃからつい・・・」

と、テヘツと笑って羽織のせいで見えなかったベルトから銃を二丁取り出した。

ガシャン

その銃を持った手に沖田が手錠を掛けた。

「ん？何じゃこれは？」

少年が聞くと、沖田はニヤリと笑った。

「ボウズ、昨日男を脅した罪と拳銃を何で持つてるのか話を聞かせてくれねエかい。」

「え……ええええええ！？」

「ええええええええ！？昨日の男を脅した犯人って銀さんと七さんの知り合いだったんですか！？」

ここは昨日の現場。そこで銀時達はテレビに映っていた少年を探していた。

「そーだよ、あのバカ何やらかしてくれてんだか・・・」

銀時は辺りをキョロキョロ見回す。

「あんなチビとどこで知り合ったアルか？」

神楽が聞くと七が、

「戦場。それと名前以外あんまりわかんないんだよねー、」

と、頭をかく。

「えっ！？さっきテレビで見たとき神楽ちゃんと同じ位だったの  
に・・・」

「そうそう、小っちゃかったのに結構強かったんだよ。」

七が話していると、

「その話もう少し詳しく教えてくれねえかね。」

建物の陰から刀を持った男2人が出てきた。

「おいおい何なんだコノヤロー、このご時世に刀なんぞぶら下げ

て、  
」

銀時が男2人を睨むと、

「昨日俺たちの部下がそのクソガキにやられちまってねエ、死に  
たくなかったらつ  
いてきてもらおうか。」

もう一人の男が刀を突きつける。だが4人は、

「イヤだっ！！」

という七の言葉とともに走り出した。

「あっコラまでエエエエ!!」

真選組屯所。

「何で発砲した？」

「じゃから道を聞いたら逃げたからというときに。」

「うそつけエ!!!!どんなに氣イみじけー奴でもそんなすぐ発砲し

ねえわ！！」

「そうですぜ、土方さんじゃあるめェし。」

「総悟、お前後で一回殺す。」

そうなかなか進まない取り調べをしていると、

ピルルル

土方の携帯が鳴った。見ると「久琉我 七」と書いてあった。通話ボタンを押すと、

『あつトシくん？今攘夷浪士に追われててそしたら攘夷志士のアジトを見つけたから大至急来てくんない？』

という七ののんびりした声が聞こえた。

「追われてる割には余裕じゃねーか。」

土方が毒づくと、

『バカ言わないでよ、あいつらまくのにどんだけ大変だったと思ってるの？』

相変わらずのんびりした声が返ってきた。

「七姉!？」

突然少年が叫んだ。その声は七にも聞こえてたようで、

『玲くん!？そこにいたの?』

七の嬉しそうな声が携帯から聞こえる。

「何でおんしが生きとんじゃ!？人がどんだけ心配したと・・・」

『お説教は後で聞くから来てくれない?今けっこーヤバイから、場所を昨日玲くん

が男の人たちに道聞いたところ、じゃーね。』

プツン

一方的に七は携帯を切った。

「という事じゃ。」

少年が土方に目をやった。

「ったくあの女言いたいことだけ言って切りやがった・・・おい  
総悟！」

土方がそう言つと沖田は、

「へーい。」

と部屋を出て行った。そして土方は少年の手錠を外すと、

「おら、あいつの場所はお前しか知らないんだから行くぞ。」

と襖を開ける。

「いいのか？」

少年が聞くと、

「一応一般市民の安全が第一なんでね。つーかいい加減名乗ったらどうだ？このままだとずっと「少年」になるぞ。」

土方は少年に向き直る。

「おおっ ヤバイヤバイ俺は「雷門<sup>らいもん</sup> 玲翔<sup>れいしょう</sup>」じゃ、よろしく。」

少年こと玲翔はニコツと笑った。

小説で他のキャラと違っていてことが一発でわかるのって口調じゃね？（後書き）

次は沖田をもっと出そう（・・・）

感想待ってます！

シャイはシャイを隠そうとするがバレバレ（前書き）

玲翔編・・・編とか付くけど次ぐらいで終わります。

シャイはシャイを隠そうとするがバレバレ

あるビルの周りを攘夷浪士達がウロウロと歩いている。

そのビルから少し離れたゴミ捨て場に並んだ四つのポリバケツから声がした。

「いる？」

「いねえ。」

「いないアル」

「クサッ！僕のバケツ生ゴミ入ってたんですけど・・・」

ガコッ

ふたが外れ、四人がポリバケツから出てきた。

「ホントにここでいいのか？」

銀時が聞いた。

「そーだよ、だってこれ見てよ。」

七は針が四、五本刺さっている壁を見る。

「何で針アルか？」

神楽が首をかしげる。

「玲くんが使う銃はねえ・・・」

七が何かを言いかけた時、

「アッいたぞ！こっちだ！！」

一人の攘夷浪士の男に見つかってしまった。その声を聞いて男たちがどんどん集まってくる。

「さあ俺達と一緒に来てもらおうか、」

一人の男がそう言いながら刀に手をかける。

「んだよしつけーな、そんなに大事な幹部だったのか？昨日玲にやられたやつ。」

銀時が鼻をほじる。

「フン、あんなのただの捨て駒さ、ホントの狙いはその玲<sup>銃使い</sup>。うちの大将は銃使いと聞くとすぐに殺りたがるからこつちだつて困ってるんだけど、連れてかないとこつちが殺されちまうんでね、だから早くそいつがどこにいるか吐け。」

男の声色が変わった。だが銀時はほじつた鼻クソを男の方に飛ばすと、

「そんなにおつかねえならますます言えなくなつちまつたじゃねーか、何モンなんだその男？」

と聞いた。

「「戦場に潜む漆黒の影」って聞いたことねエか？」

その言葉に興味なさそうに聞いていた七と銀時が男の方を見る。

男が続ける。

「気配無く獲物に近づき獲物が気付く前に仕留める。攘夷戦争で活躍したって話だぜ、分かったろ、分かったらさっさと――。」

ビュン！！

そこまで行ったとき、背後から針が飛んできて男の鬘を貫通してビルの壁に刺さる。

パサッ

男の鬘はボトツと落ち、髪が落ち武者風になった。

「はっ？」

男がいきなり起きた出来事に戸惑つてると、

「似合っちよるぞ、髪。」

後ろから声がかけられた。後ろを向くと、銃を両手に構えた玲翔とその玲翔の銃の腕に驚いている真選組隊士たちがいた。

「し、真選組！？」

「まずい！！逃げろ！！」

攘夷浪士達は逃げ出すが、

「逃がすな！一人残らず討ち取れエ！！」

土方の声で隊士達が攘夷浪士達に斬りかかる。

玲翔は拳銃をクルクルと回して腰ベルトに収めカッコ良く決めるが、

スパン！！

「痛っ！！何しゆう土方さん！」

「だから発砲すんなって言ってんだろ！次発砲したらマジでしょっ引くからな！！」

土方に後頭部をはたかれ涙目になる。そして頭を押さえながら、

「じゃが何でこないに攘夷浪士がたくさんおるんじゃ？」

不思議そうに聞くが、

「オメーのせいだろうが!! オメーが道聞くだけで発砲するからこんなことになったんだだろうがよ!!」

銀時が怒鳴り散らした。

「おお銀兄か、相変わらずクルクルパーマじゃのう、」

「パーマカンケーねーだろ、それよりお前今まで何してたんだ。」

「いんや辰兄のところではたらいちよったんじゃけどヒマでヒマでしよーがないきに辰兄に話して江戸で下してもらったんじゃ、」

そこまで玲翔は言つと急に表情が真面目になった。

「で、何でアイツ<sup>七</sup>がいるんじゃない？死んだんじゃないなかったんか？」

「知らねーよんなもんいきなりへらへら笑いながら「久しぶり〜」とか言ってきたやつて・・・ホントびびったぜ・・・」

「こっちの迷惑も少しばかり考えてもらわんと困るんじゃない、」

そうひそひそ話していると、

「おーい全部聞こえてるよー。」

七が二人にそう言いながら玲翔の肩に手を掛けた。

「ねえねえ玲くん、ここの頭がさ、どーしても玲ちゃんと殺り合い  
たいんだって、」

「そんなん知らん、真選組に任せとけば大丈夫じゃろ。しかも次発砲すれば土方さんにしょっ引かれるきに。」

玲翔は攘夷浪士を次々と切り倒していく土方をチラリと見た。だが、

「その頭、自分のこと「影」って名乗ってるらしいよ。」

「その頭はどこにいるんじゃ、」

その七の言葉を聞くと、今まで渋っていたのがウソのように銃に手を掛けた。

「いいの？渋ってた理由ってしょっ引かれるからだけじゃないんじゃない？玲くん、真選組が気に入ったんでしょ、だからあんまり問題おこしたくなかったんでしょ？しょっ引かれたら役人なんかねないから。」

玲翔の耳がピクリとなる。しかし首を振ると、

「エエんじゃ、そもそも攘夷戦争に参加しちよった奴が役人やろ  
うなんぞ無理な話じゃきに。それより頭がいる場所はどこじゃ？」

玲翔の表情がフツと哀しそうになる。

「あそこらへんに少しでかいビルがあるでしょ、さっきまでそこに  
攘夷浪士がうじゃうじゃいたから多分あのビルだと思う。」

七が答えると、

「分かった。」

玲翔はうなずくとビルに向かって走って行った。

「良かったのか？行かせて、」

銀時は耳をほじりながら言う。だが七はニコツと笑って、

「玲くんはああ見えてシャイだからね、絶対自分では言えないと思うから・・・」

と、攘夷浪士達が大体片付き肩で息をしている近藤に目を向けた。

「なるほど、だから礼を遠ざけたわけね、」

「可愛い弟への愛ってやつ？」

「俺アてつきりさっきの言葉に腹が立ったからわざと行かせたのかと思ったんだけど気のせいだったか。」

「ハハハッ・・・まさかア・・・」

七はそう笑うが頬には冷や汗が垂れる。

「じゃあ俺はあのシャイボーイを追うとするかね、オイ神楽、新八。」

「やっと出れたアル。」

「もう出番ないかと思いましたよ。」

ぶつくさ言う二人を引き連れ銀時もビルに向かって走って行く。

七はフウとため息をつき、

「ゴリさん！」

と近藤の方に歩いていった。

「七ちゃん・・・ゴリさんは止めてくれない？」

だが七は近藤の言葉を無視して、

「ねえゴリさん、お願いがあるんだけど・・・」

と自分の顔の前に両手を合わせた。

シャイはシャイを隠そうとするがバレバレ（後書き）

次は沖田出したい！！（^ー^；）

感想待ってます！！

集団行動で大切なのは相手を気遣う事（前書き）

この頃急に腹痛が来ます。

昨日はプールの時来たから大変でした。さっきまで元気だった人が急に腹痛を起こすってのは変でしょう？だから先生にも疑いの目で見られるわけです。

先生、悪いのは私じゃありません！急に腹痛になる腹です！！（あ、結局私か・・・）

## 集団行動で大切なのは相手を気遣う事

攘夷浪士がいるビル。その入り口で玲翔と見張り二人が口論を繰り広げている。

「じゃけんおんしらの仲間に入れとくれゅーとるじゃろ、」

「いやダメだから、てか何で土佐弁？」

「土佐弁なめんなよクソジジイ。行くところがないきにいいじゃろう。」

「今標準語でなんか言っただよな、ぼそつとなんか言っただよなこのチビー！」

「そんなこと気にしとつたらハゲるろー、だって攘夷浪士って響きが何かカッコ良いじゃろ？」

「・・・なんで俺たちが攘夷浪士だって知ってた?」

二人は玲翔を睨みつける。

「やべっ!! な・・・何となく?」

「嘘つけエエエ!!」

言い訳が通用するわけなく、男たちが刀を抜いて襲い掛かってくる。玲翔も銃に手を掛けるが、

ドサッ

突然二人が倒れる。玲翔が今起きた出来事に（アレ？俺エスパー使えた？）なんてことを考えていると、男二人の近くに木刀が転がっている。

「オイオイ、就職パーにするつもりか？」

けだるそうな声がし、銀時、神楽、新八が姿を現した。

「銀兄とチャイナ風と眼鏡・・・・・・・・」

「誰がチャイナ風アルかア！！私はかぶきちょうの女王、神楽アル！」

「僕も眼鏡じゃありません！新八です！」

玲翔の言葉に即座に神楽と新八が反論する。

「銀兄と神楽と新八っばい眼鏡は何しに来たんじゃ、」

「結局メガネじゃねーか!」というツツコミを無視して銀時が、

「七がどっかのシャイボーイのチビの就職を手伝えとき、」

と木刀を拾う。

「銀兄、俺は就職をしようとしてもしておらんしシャイでもチビでもないきに。」

「チビは事実だろ。」

「髪の毛抜かれたいんかテンパー。これは俺の問題じゃ、関係ない奴を巻き込むわけにはいかんぜよ。」

玲翔はフィとそっぽを向く。

「やっぱシャイボーイアルな、」

神楽がフンと鼻で笑う。それに力チンと来たのか、

「おまんはシャイボーイの意味わかつとるのか、」

神楽を睨む。

「うるさいチビ、私知ってるアルよ、お前が真選組の戦ってる見てた時目がキランキランしてたアル。」

「ッあれは違う！！黒服がかっこいいなアとか思っただけじゃきに別に入りたいとかじゃ・・・」

「シャイツーかツンデレじゃね？てゆうか敵地目の前にして何やってんだアアア！！」

「「黙れ眼鏡!!」」

ゴシヤア!!

「ぶべら!!」

神楽と玲翔のストレートが新八に決まる。

「何やってんだよオメーらどんだけ進まねーんだよ、まだ始まつてここから一步も動いてねーよ。何にもやってないのに新八<sup>眼鏡</sup>死んだぞ。」

「いや死んでねーよ!!」

グチグチいう銀時に新八はツッコむ。

「さあてそろそろ進めねーとやべーな、行くぞオ。」

銀時が木刀を肩に担ぐ。

「オウネ!!」

「ハイ!!」

神楽と新八も威勢よく返事をする。

「待て!! 銀兄はいいとしておまんらは戦えるんか?」

玲翔があわてて聞いた。すると銀時は、

「あいつらなら大丈夫だ。」

と言って新八にそこらに落ちていた鉄パイプを放る。

ドッゴォン!!

神楽がビルのドアをけ破った。

「何だ!？」

「何があつたんだ!？」

その音を聞いて、階段からたくさんの男が降りてくるが、

「ホアチャア!!」

ズバンッ！！

「どくアル！かぶきちょうの女王、神楽様のお通りネ！！」

神楽が傘を振るといっぺんに何人もの男たちが吹き飛ばされる。

「・・・あいつ、筋肉の仙人にでも育てられたんか？」

玲翔は驚きのあまり意味不明なことを言ってしまう。

「神楽は宇宙最強戦闘種族「夜兎族」だ。」

「夜兎族！？」

隣で銀時が解説してくれた。

「上には行かせるな!!」

「あの眼鏡が一番弱そうだな!やれエ!!」

「誰が弱そうだな!!」

ボゴッ!!

新八のツツコミと鉄パイプが炸裂する。

「新八はツツコミ流眼鏡剣の使い手だ。」

「ほう、」

「何納得してんだ！！僕は天堂無心流です！！」

ここでも新八はツッコむ。銀時は頭をボリボリかくと、

「ここは俺達に任せろ、お前はバカな名前を名乗ってるクソヤロ  
ーをつぶせ。」

と、いつものけだるそうな声で言った。

「銀兄・・・ありがとう。」

玲翔はボソツと呟くと、男たちをかき分け階段を上って行った。

**集団行動で大切なのは相手を気遣う事（後書き）**

あああああ！！また沖田出せなかった！！

次こそは必ず！！

感想待ってます！！

ガキはガキなりにガキとして頑張っている（前書き）

訂正 玲翔の服は黒装束じゃなくて青装束でした。

ガキはガキなりにガキとして頑張っている

「まず、お前は親に電話しろイ。」

沖田が玲翔にケータイを向ける。だが玲翔は真顔で、

「んなもんおらん。」

そっけなく言った。

玲翔は、親がないというところ「かわいそう」などと言われるのがいやで仕方がなかった。

別に自分を拾ってくれた姉のような奴や兄のような奴はいる。

だから別に自分がかawaiiそうと思ったことはあまりない。

でも哀れまれるとポジティブに生きてきた自分がむなしくなってくる。

哀れむだけ哀れんで助けたくない。

みんな口だけだ。

コイツもそうなんだろう。

そう思っていると沖田は、

「ふーん、じゃあいいや。」

開いていたケータイをぱこつと閉じた。

『ねえねえ、君は親がいるの?』

『おらんわ。』

『ふーん、じゃあいつしよにこない?』

玲翔は七に拾われた時の言葉を思い出した。

「どうしたんでイぼーとしちまって、」

「昔、金髪のバカに拾われた時んことを思い出したきに。」

不思議そうに聞く沖田に答える玲翔。

「お前の「拾われた」とちょっと違うんだがここにいる俺達も近

藤さんに拾われた口でねエ、」

「!!」

「俺は友達を作んのが下手で昔は独りだった。そんな時近藤さんに拾われたんでイ。だから近藤さんには返しきれねエ恩がある。ここにいる隊士は皆近藤さんに恩があるもんばっかだ。だから俺たちは俺達を拾ってくれた近藤さんを護る。お前もそうだろイ、」

沖田の真っ直ぐな眼を見て玲翔は素直に沖田のことを凄いと思った。だが沖田も眼が曇る。

「でもあの土方クソヤローはどうも邪魔でねエ、毎朝バズーカで殺してやろうと思ってんだけどどうまういかないんでイ。」

「少しでもおまんのことを凄いと思った俺が恥ずかしくなってきたきに。」

「へえー、総悟お前は俺のことを毎日射殺しようと思ったのか。」

後ろを振り向くと青筋を浮かべた土方が立っていた。

「いやでさア土方さん、盗み聞きなんて気持ち悪いですぜ。」

「総悟、お前ホントいつぺん死ねエエ!」

土方と沖田の追いかっこが始まった。

玲翔はそんな兄弟のような土方と沖田をうらやましそうに見ていた。

そんなこと思い出していると、玲翔はビルの最上階までついた。上ってくる途中、敵に遭遇したりしたが蹴りや突きで倒し拳銃は抜かなかった。

ここに頭がいるのだが人の気配がしない。恐ろしいほど静かだ。

コッソ、コッソ、コッソ、

玲翔の靴の音だけがビルに響く。

少し歩くと扉があった。

ギィ

扉を開ける。そのとき、

ドンー！！

いきなり拳銃の弾が飛んできた。

スレスレでかわす玲翔。

「ほう、俺の弾を避けるなんてやるなボウズ。」

低い男の声がしたが、暗くてよく見えない。

「おまんが影か？」

明かりがパツとつく。そこには銃を構えた三十代ぐらいの男が立っていた。

「そうだ、俺が影だ。ボウズ、何故一人で来た？外には真選組がいたろ？」

男は窓を指差す。

「下らん名を言い触らしちよる偽物なんぞ俺一人で十分じゃ、」

その玲翔の言葉に男が青筋を浮かべる。

「何を根拠に言ってるんだ、見たことでもあるっていうのか？」

「見たよ、少なくともおまんじやないがな。」

男にますます青筋が浮かぶ。

「じゃあそいつがどんな奴だったか教えてくれないか？・・・生きてたらなっ！！」

ドオンドオンドオン！！

玲翔に向かって銃弾が飛ぶ。

「一つ、影がもつとる武器は普通の銃じゃのーて針弾銃つつ針が出る銃じゃ、鉛玉なんぞ出はせん。」

玲翔はそれを余裕でかわす。

「二つ、影は小柄なガキじゃ、こんなおっさんじゃないきに。」

「お前っ！？まさか・・・」

男がそついうと玲翔の姿がフツと消える。

「なっ！？どこに行った！？」

「三つ、影は下で戦っちよる仲間を高みの見物という卑劣なまねはせんわ、」

トンッ

いつの間にか背後に回った玲翔の手刀が男の首筋に決まる。

「こんなに弱かったんなら渋らんでもすぐ行けばよかったわ」

「お前が・・・影・・・だったの・・・か・・・」

とぎれとぎれに言っ て男は倒れる。 そんな男を冷たい目で見降ろした玲翔は、

「二度とそんな下らん名を名乗るな、もし次その名を名乗ったら・  
・殺すぜよ。」

子供とは思えないドスの利いた声を浴びせ、また静かになったビルを出口に向かって歩いて行った。

ガキはガキなりにガキとして頑張っている（後書き）

次で終わりです（^ー^；）

感想お願いします。（ホント一言で良いんでー！）

次回！玲翔は真選組の一員になれるのか！？そしてその小説はいつ投稿されるのか！？

面接ではとにかく笑顔（前書き）

突然ですけどストパーってすごいですね、私のベーターベンヘアーがさらっさらのツヤツツヤに！＼（　o　）／！！

銀さんのクルクルパーマはストパーをしても直んないってゆうけどあの美容室ならいけるかもしれない・・・↑（バカ）

面接ではとにかく笑顔

真選組屯所内の少し開けた場所、

「あー・・・これはどうゆう事じゃ？」

玲翔の向かいには沖田が、そしてその二人を取り囲むように大勢の隊士たちが周りにいる。

「どうゆう事って真選組入隊試験でさア、お前真選組に入りてエんだろイ」

沖田の言葉に玲翔は仏頂面になり、

「そげな事は一回もいつちよらん」

と、フイとそっぽを向いた。すると、

「ガッハッハッ！照れなくても七ちゃんから聞いたぞ！」

豪快な笑い声とともに隊士達の中から近藤が前に出た。

「七姉から何ば聞いたんじゃ」

玲翔の顔がますます仏頂面になる。近藤はまた豪快に笑うと、

「実はな……」

「お願いって何だい、七ちゃん？」

近藤が首をかしげると七は、

「玲くんを真選組に入れてくれない？」

と、単刀直入に言った。

「絶対足は引つ張らないから戦力は大丈夫だと思うよ、後は性格かな・・・素直じゃないんだよね、心ん中では超真選組に入りたがつてたからヨロシク！」

七は言いたいことだけ言うとビルに向かって歩いていく。歩いている途中、何かを思い出したように振り向くとニコツと笑って、

「言い忘れてたけど、使えなくなったら即クビにしてドブにぶっこんじゃっていいからねー」

啞然している近藤を置いて七はまた歩き出した。

「いやーあの笑顔からドブにぶっこむっていつ言葉が出るとは思わなかったな」

「真選組局長にお願いってあのくそアマはどうしたらそんなことができるんじゃ・・・」

玲翔は怒る気力が失せたのかただ呆れている。

「真選組内では結構有名だぜイ、攘夷浪士どもが屯所に殴り込みに来たときなんか刀をつかったにもかかわらず一滴も血を流さず全員を倒しちまったからついたあだ名は「無血の女侍」なんてねイ」

「だがいくら七ちゃんのお墨付きだからってすぐ入れることはできんからな、うちの総悟に勝ったら入隊ってことでどうだ？」

近藤の問いに玲翔はコクンとうなずいた。

「よし、じゃあルールは三十分間総悟の持っている武器に「身体」があたらなかったらお前の勝ちだ。反撃してもいいぞ」

玲翔の顔に少しの余裕が現れた。

「あたんなきやエエんじやな」

ガチャ、針弾銃の安全装置を外す。

「手加減しませんぜ」

ジャキン、沖田も刀を抜く。

「では、始め!!」

近藤の声とともに沖田が玲翔に向かって刀を振り回す。玲翔はそれらをぎりぎりで避けると後ろに跳んで沖田と間合いを取り針弾銃を連射する。

キンキンキンキン!!

沖田は飛んできた針を全て刀で弾く。そして一気に間合いを詰めると刀を振り下した。玲翔も針弾銃で受け止める。

ガキン！！

刀と銃のぶつかった音が辺りに響く。

「見るよあいつ、沖田隊長と互角にやりあってるぞ」

「あと何分だ？」

「十分だ」

「あともう少しじゃねーか！コレ行けんじゃね？」

玲翔は沖田の剣劇を次々かわしていく。

残り五分になったとき、

「やっぱり刀だところちの方が不利か・・・しょーがねエ」

ガシャコン

「アレ・・・沖田君？それはなんじゃ？」

玲翔は沖田が出したのを見て、冷や汗がたらたら垂れる。

「何って・・・バズーカでさア」

ツドオン！

「えええええ！！あんなんアリか！？どー見てもド○えもんの秘密兵器じゃろつがー！！」

玲翔がさっきまでいた所は真っ黒な焼け野原になっている。沖田は慌てふためいてる玲翔を見るとサディスティックな笑みを浮かべた。

「別に刀だけとは言ってねエ、相手の武器を刀だけと思っちゃいけないア玲翔くん」

ドオンドオンドオン！！

「ぎゃあああああああ！！」

周りにいた隊士たちも避難する。だが、逃げ遅れた隊士に向かってバズーカの弾が飛んでいく。

「やべっ！！」

その時、バズーカと逆方向に逃げていた玲翔がグルンと方今転換し、隊士に向かって走り出した。そして隊士の前に立つとバズーカの弾を真正面から撃ちぬいた。

ドッガァン！

空中で爆発したバズーカの煙が辺りを包む。

「ふう……」

トン、ため息をつく玲翔の頭に刀の峰が載る。

「あ……」

振り向くと沖田が玲翔の頭に刀を載せていた。

不合格。その言葉が玲翔の頭を飛び交ったがかけられた言葉は意外だった。

「合格でイ」

え？合格？互角じゃなくて？

ポカンとしている玲翔をよそに沖田は続ける。

「逃げていた時間ジャスト三十分。まあ逃げ切ってもさっきの隊士助けなかったら首たたつ斬ってやるところだったぜイ」

「総悟、お前は壊した屯所弁償な」

避難していた土方が沖田に声をかける。

「土方さんそれはねエですぜ、俺と土方さんで1：9つつーことで」

「何で俺がほぼ払わなきゃいけないーんだ、あと玲はちょっとこい」

土方はまだポカンとしている玲翔を引きずっていく。

土方に連れていかれた部屋には近藤が隊士服を持って座っていた。

「玲翔、そこに座れ」

土方に言われ座布団に正座する。近藤はウオッホンと咳払いをすると改まった口調で、

「えーこれより雷門玲翔を五番隊隊長に任命する。ほれ、隊服だ」

近藤から渡された隊服はピッタリで、銃を差せるベルトも付いてる。

「おおー」

玲翔は目をキラキラさせて隊服を見る。

「ホントは屯所に住んでもらいたいんだがあいにく部屋がなくてな、部屋が開くまでどっかに住んでもらいたいんだが・・・」

近藤がすまなそうにすると玲翔は、

「銀兄に聞いてみるから大丈夫じゃ、ちよっくら万事屋に行ってくるぜよ」

と言って部屋を飛び出してった。

「まったくガキかあいつは？」

土方はため息をつく。

「ガキだよ、あいつは」

近藤は嬉しそうに走っていく玲翔を見て豪快に笑った。

ちなみに玲翔は万事屋に居候することになった。たそうな、

面接ではとにかく笑顔（後書き）

夏休みなんて速いスピードで投稿できると思います。

遅くなってスイマセン、感想待ってます。

**電車で居眠りするとほぼ起きたら終点（前書き）**

更新遅れてスイマセン！

先着三十名の無料キャンプにまんまと乗せられてしまいました！>  
――）<

電車で居眠りするとほぼ起きたら終点

それは、散歩がてら買い物をして万事屋に帰る途中のこと

「よしっ！卵も買ったし今日はグラチャンの好きな卵かけごはん  
」

カランコロンと下駄がリズムミカルに音を鳴らして、頭についているかんざしが黄金色の髪に合わせてシャランと揺れる。

そう歩いていると、肩がすれ違った豚型の天人とぶつかった。ぶつかった天人は持っていた重そうな荷物をドサツと落した。

「わっ！ごめんなさい！」

七が天人の落とした荷物を拾い、天人に近づく。

すると、ふいに天人から昔嫌なほど戦場で嗅いだ血の匂いがうっすらした。

「ああ、すまない」

天人は何も気づかず七から荷物を受け取ると足早に去って行った。

七は笑顔で天人に手を振る。だが天人が建物の角を曲がるとフツと笑顔が消えた。

そして七は小走りで天人の後を追う。

しばらく後をつけると天人は一隻の船に入ってしまった。その船に書かれていた大きな旗に疑問を持ったがあまり深くは考えずに七も別の入り口から入っていった。

七が船に入った瞬間、扉がガシャンと閉まった。

「あれ・・・？」

扉は押しても引いてもびくもしない。

「おい豚開けろー今日のおかずにすんぞー」

扉をドンドンとたたくが反応無し。

すると、エンジンのような音と妙な浮遊感がした。窓を見ると船は地上からどんどん遠ざかっていく。建物はもうおもちゃのように小さい。

「マジでか」

七はあまりの衝撃にその言葉しか口に出てこなかった。

どれぐらいたっただろうか、七は扉に背中を預けて座っていた。  
船はターミナルに入っただけで、思うとすぐ目の前は宇宙だ。

「あーあ、卵腐っちゃうよ、保冷剤かなんかないかな」

相変わらずのん気なことを言っていると、窓の外にドデカい要塞が見えた。その要塞がどんどん近くなってくるとゆうことは船はそこに向かっていくのだ。

「うわっ、デッカー……ダース○イダーでも出てきそう」

七の眼が輝く。

要塞に入るとき、またあの旗が見えたが七は特に気にしない。

その旗は、ダース○イダーよりはるかに恐ろしい獣が潜んでいることを示していたが、七は知る由もなかった。

船が要塞の中に入っていく。七は位までに扉によっかかっているといきなり扉が開いた。

「まったく・・・うちのバカ提督はわざわざ地球から食いモンを取りよせんだ？」

要塞から船が来るのを見ていたばさばさの髪にチャイナ服を着ている男がぼやく。

「しょうがないじゃん阿伏兔、地球のご飯は美味しいからね」

阿伏兔と呼ばれた男の隣に笑顔で立っているオレンジに近いピンク色の髪を後ろで三つ編みにして、チャイナ服を来ている青年が答えた。

「美味しいからね、じゃねーだろこのすつとこどっこい」

阿伏兔はため息交じりに呟いたが青年は仮面のような笑顔から表情を変えない。船は要塞に入ってきて、着陸した。

「ん？」

今まで笑顔だった青年が急に鼻をひくつかせた。

「どうしたんだイ提督」

「阿伏兔、ヒトの匂いがしないかい？」

青年は船の一つの扉の前に行くと、扉をこじ開けた。

「わっ！！」

ドサッ、扉を開けると倒れこんできたのは、

「イタタタ・・・何で急に開いたんだろ・・・ってアレ？」

着物を着た金髪の女だった。

**電車で居眠りするとほぼ起きたら終点（後書き）**

もうこれから先暇です。

夏休み、パソコンしかやることがないッス

いつも笑顔の奴って何考えてんのか分かんない（前書き）

メツチャ蚊に刺された〜！！

家族の中で何で私だけ！？

別に甘いもんも食べてないし私の血甘くないからね！！

いっつも笑顔の奴って何考えてんのか分かんない

「えーつと・・・あなたはダース○イダー？」

ここに地味なツッコミメガネがあれば七の言葉にツッコミを入れただろうが今この場にメガネはいない。

「いや、俺は神威、そこでこっちが阿伏兔、君はお侍さん？」

神威と名乗った青年は七の言葉を笑顔で軽くあしらって訊いた。

「私は七、侍だよ」

七も笑顔で返す。

「そのお侍さんがここに何の用だい」

「特に用はないんだけど帰る方法がわからなくてさ」

阿伏兔の問いに七は肩を竦める。

「おいおいお嬢さん、ここがどこだかわかるかい？」

「分かんない」

即答だ。そんな七に阿伏兔はため息交じりに、

「ここは宇宙海賊春雨だ、どうゆう経緯でここに來た？返答次第では怪我じゃすまされねエぞ」

持っていた番傘に力を込める。だが、

「やめときなよ阿伏兔、ナナだっけ？地球に帰りたいんならあと三十分後に出る船に乗ってけばいい、付いてきな」

神威の手が阿伏兔を制した。

「マジで！ありがとう！！」

七の顔がパツと明るくなる。神威はさっきと変わらない笑顔のま  
まくるりと七に背を向けた。

「おい！コイツがどっかのスパイだったらどうすんだ！！すつと  
こどっこい！」

船に行く途中、阿伏兔が小声で神威に文句を言う。神威は相変わ  
らず笑顔だ。

「カンケーないよ、スパイだったら殺せばいいんだし、それに気付いてるだろ」

神威はさつきとは違う、殺気のこもった笑顔で続ける。

「ほとんど隠しきれていて夜兎でも気付けないぐらいのかすかな殺気・・・阿伏兎、とめないでよ」

「勝手にしろバカ提督、俺は積み荷を降ろす作業に戻るからな」

阿伏兎はそう言い残し船の方に歩いて行った。

神威が後ろにいる七にいざ襲い掛かろうとしたとき、

「私は初対面の人に殺意を持たれることはしてないんだけどな」

神威の心を読んだように言った。

「あれ？何で分かったのかな？」

神威が振り向いた。振り向いた笑顔はいつもの仮面のような笑顔だ。

「あんなに殺気出してたら嫌でも気付いちゃうよ」

さっきまで自分の命を狙われていたのに、お氣楽に笑っている。

「へえ……」

そう呟くとまた神威は七に背を向け歩き出した。

七はしばらく何かを考えていたが、やがて不意に口を開いた。

「ねえ、誰かに似てるような気がするんだけど・・・知らない？」

「・・・・・・さあ？」

神威は前を向いたままだ。

「誰かに似てるんだよね・・・」

まだ神威を見て誰かに似ているといっている七に神威は一つ質問をした。

「侍って、何で他人をあんなに必死に護ろうとするんだい？」

すると七はニコツと笑ってこう答えた。

「人間は弱くて一人では生きていけない。だから護りあってる。  
私たち  
って言う人もいるけど私はその人たちに死なれると人生つまんなく  
なっちゃうから、かな？」

船が見えてきた。神威は七に振り替えると三番目の船を指差した。

「あの船に乗ると今日中には地球につく。どう忍び込むかは自分で  
考えなよ」

「ホント助かったよ、ありがとうーじゃー!!」

七はそれだけ言い残すとダッシュで船へと向かった。

「やっぱり侍って面白いな」

神威は仮面のような笑顔でポツリと呟いた。

七と会ってから二時間後神威は通路を歩いていると左目に包帯をしていて女物の着物を着ている男、高杉に会った。

「やあタカスギ」

「よう」

短い挨拶を交わしてから神威が口を開いた。

「そういえばさっき、侍に会ったよ」

「地球に行ったのか？」

「違う、船に忍び込んできたんだ、可笑しいでしょ」

「春雨の船に忍び込むたアよっぽどのバカだな」

「そんでね、そいつ金髪で確かナナって言ったな」

その言葉を聞いて、高杉は一瞬驚いた表情をしたが、

「ククツ、七が生きてたか・・・」

と笑いだした。

「何？知り合いだったの？」

神威が訊くと高杉はまた笑った。

「昔知ってたただの大馬鹿野郎さ」

いっつも笑顔の奴って何考えてんのか分かんない（後書き）

くオマケく

船の中、

「やばっ！！卵忘れてきたー！！」

ヤベッやっちゃった・・・と言った時にはもう手遅れ（前書き）

夏期講習に行かされる・・・ヤバス×10

ヤベッやっちゃった・・・と言った時にはもう手遅れ

夜のかぶきちょう、夜だというのにネオンの光で町は照らされ昼間とは少し違う活気がある。

だがそんな夜のかぶきちょうに合わない黒服の男達がある建物を取り囲んでいた。

「おい山崎イ、ここで合ってんだろうな」

「へい、間違いありません」

黒服の男達の中の二人、土方と山崎が建物を見上げた。

土方は銜えていた煙草を地面に落として踏みつけると隊士たちに指示を出した。

「一番隊、二番隊は正面から！三番隊、四番隊は裏から回れ！！  
五番隊は浪士どもが出てくるまで待機！」

「ハイ！！」

隊士たちは一斉に建物の中に入っていく。その様子を見ながら玲翔は口を開いた。

「なあ土方さん、今回はここで誰を捕まえるんじゃないかのう」

すると土方は少し眉を顰めた。

「テメエ、会議の内容ちゃんと聞いてなかったのか？」

「耳が拒絶反応ば起こして土方さんの声だけよく聞こえなかった  
きー」

「その使えねー耳斬り落としてやろうか!？」

しれっとしている玲翔に土方は青筋を浮かべて刀を抜こうとしたとき、建物から網笠をかぶった長髪の男が建物から走り出てきた。

「出てきたか・・・玲」

土方はさっきのやり取りなど無かったようなクールな声で玲に言った。

「わかつちよるわ、五番隊バズーカ用意!!」

ジャコン、五番隊全員がバズーカを構える。

「撃てエ!!」

ドッゴォン！！、玲翔の声とともに一斉にバズーカが発射された。  
土煙が起き視界を遮る。

「殺ったか？」

土方が煙の先を見るが人影は見えない。だがその煙に気を取られている間に塀を乗り越えようとする網笠をかぶった長髪の男に玲翔は気づいた。

「あっちの塀じゃア！！撃てエエ！！」

玲翔の怒鳴り声で次々にバズーカが塀に発射される。玲翔はバズーカの音とともに地面を蹴った。

「待てエエエエ！！」

追いかけるながらベルトから銃を抜き発砲する。

「誰が待つか！―幕府の狗めがア！―」

男が挑発するように言った言葉に玲翔は首をかしげる。

「ん？この声どつかで・・・」

しかし思い出せないの（思い出したが思い出さなかったの  
で）、網笠の頭ギリギリの所を撃ちぬいてみた。計算どおり男の頭  
から網笠が落ちる。男は足を止めてこちらを振り返る。

「まさか真選組に銃使いがいたとは・・・」

男の言葉が玲翔の顔を見た瞬間止まった。

「ヅラ、おまんは攘夷浪士じやんとしになって何しちゅう」

「ヅラじゃない桂だ。お前も真選組ほんなとくろで何をしている・・・しかし久しぶりの再会だろ、もう少し感動的な場面もあっていいんじゃないか？」

桂は「やつぱり」という顔をする玲翔に向かってぼやいた。が、玲翔は容赦なく桂の眉間を狙って連射する。

「こげん形で会っちゃったんに感動をクソもないじゃろう」

「ちよつ、危なっ何か別な悪意を感じるんですけど・・・」

必死で避ける桂に玲翔は無表情でこう吐き捨てた。

「ロンゲは嫌いじゃ、せめてそのウザったい長髪肩まで切れ」

「それ個人的に俺が嫌いなだけだろう！！てか後半土佐弁はアアア！！」

「細かいことばかり気にしちゃったらハゲるろー、つーかハゲろ」

玲翔はなおも無表情で桂の眉間を狙う。しばらく無言だったがそろそろ息が切れてきたとき、桂が口を開いた。

「大体何で真選組なんかにいるんだあいつらは幕府の狗だぞ！」

玲翔の銃弾が止まった。表情は相変わらず無表情だ。

「どこに行こうが俺の勝手じゃろ、それと真選組は幕府の狗なんかじゃないきに、やつらは己の信念を持った奴らの集まりじゃ。それに俺から見ればおまんが何しゆう、世間から見ればテロリストじやきに。」

「何と言われようが構わないさ、それで国が護れるのなら。お前

はどうだ玲、真選組そんなところで幕府の言いなりになるより俺とこんか？」

桂の誘いに玲翔は漆黒の瞳をギラリと光らせて銃を構えた。

「断る。そのウザったい長髪見るだけで吐き気がしそうじゃしの、それにな、結構真選組（じっく）が気にいっちやるんじゃ」

そんな玲翔に桂はため息を付くと懷からお菓子の袋を出した。

「お前の気持ちは分かった。だがこれからは敵同士だ、手加減はせんで、んまい棒鎖羅魅（サシミ）！！」

ドフッ！！妙な爆発音がして煙が立つ。

「フハハハ！！さーらば！！」

そして、煙が晴れるころには、桂の姿はなかった。

「なんじゃそら、サラミ？」

その光景を見て玲翔は呆れたように呟いた。

ヤベッやっちゃった・・・と言った時にはもう手遅れ（後書き）

オチが毎回ヤバイですねもっと改良せねば） ・ ・ （ ） φ

最近町内マラソンとか少なくて？（前書き）

アサガオの生命力ハンパないです。毎年何もしなくても勝手に生えてしかも年々増えるもんだからそこら中アサガオだらけ・・・きれいだからいいんすけどね、でもちよつと増えすぎ・・・

新「間引きとかしろよ!!」

いやタルいんで・・・つーか外出たくない

新「その歳からア!?!あんだ今からそんなでどうすんの!?!大人になつたらダメ人間確定だよ!!」

お母さん!?!

最近町内マラソンとか少なくてね？

かぶき町一番街の入り口、そこにはランニングシャツを着た人たちであふれかえっていた。

その中で唯一ランニングシャツではない五人はかなり目立っている。

「大体よオ、何で俺たちが朝っぱらからマラソン大会なんぞに出なきゃならねーんだよ、オメーら俺の血圧いくつだか知ってんのか」

めんどくさそうに毒づくのは銀時だ。

「たまにはいいじゃん、どうせ仕事もなくて暇だったんだし賞品も出るって！」

七は丁寧に畳んである一枚のチラシを開く。

「賞品って何アルか！？豚まんアルか？あんまんアルか？ピザまんアルか？」

「その中には無いっちゅーことは確かじゃ」

目をキラキラさせて言う神楽の考えに玲翔は即座に否定した。

「あれ？玲翔くん今日真選組は？」

新八の問いに玲翔は涼しい顔で答える。

「心配ないわ、休みはちゃんと盗って来たからのー」

「玲翔くん？字が違うんですけど、完全にサボりだよ、絶対休み取ってないよね」

ジャカ、新八の眉間に針弾銃が突きつけられる。

「黙つとけや腐れメガネ、お前の存在真メガネつ二つに割ったうえド  
タマぶち抜くど」

低い声で玲翔は新八を睨みつける。

「スイマセンでしたッ！つーか何で毒吐くときだけ土佐弁じゃな  
くなんの？」

「そいで七姉、その賞品うちゅーのは何じゃ？」

「無視か？オイ無視か？」

若干キレ気味の新八をよそに七はチラシを読み始める。

『かぶき町主催！夏のチキチキ！！マラソン大会！！』

この大会の目的はこのかぶき町を一周してもらい一番最初にここに帰ってきた人には時価三十万の卵が渡されます。

しかし普通のマラソンでは詰まらないのでマラソンの途中ではいくつかの障害があなたたちを待ってます。

さあ！君たちは無事戻ってこれるのだろうか！？

なお、本日のマラソンで死者、負傷者が出てもかぶき町町内会は一切責任を負いません（笑）  
『

「笑えるかアアア（怒）！！」

銀時と新八が怒鳴り声とともにチラシを破る。

「クスリとも笑えねーよ！！死者が出るマラソンなんて聞いたこ

とねエつつーのー！最後から二番目の文に至っては何？おちよくつてんの！？すんげーム力つくんですけど！？」

新八はものすごい剣幕でツッコむ。

「落ち着け新八、チラシの二行目を見る」

「いやもうチラシないんですけど」

「三十万の卵だぜ、売ればたんまり金が入る」

ニヤッと笑って七達の方を見る銀時。

「卵アルかアア！！メツサうまい卵かけごはん作れるネエエエ！！」

「美味そうじゃけど三十万の卵ってどうしたら三十万になるんじゃない？」

「三十万の札束食わせれば三十万の卵が産まれるんだよ」

予想どおりアホな会話しかしてない三人。銀時は新八の方に振り返ると。

「見る、あの三バカは卵を食う事しか考えてねえ、あいつらを利用すればぜってー一位になれる」

「なるほど、そして卵を売りさばくんスね」

銀時と新八は黒い笑みを浮かべる。そして卵のことでワイワイやってる三バカに歩み寄ると、

「おいオメーら、卵を手に入れるためにここは全員で協力しねーか？」

「あつ、いいですねそれ！三人も協力しましょうよ」

銀時の提案に新八もさりげなく賛成して三人を誘う。

「いいんじゃない？たくさんの方が勝てる確率上がるし」

一番最初に疑うことなく賛成したのは七だ。それに続いて神楽、  
玲翔も、

「七姉が協力するなら私も協力するアル！」

「一人残されるのはいやじゃきに俺も」

と言って賛成した。

（グッジョブ！！）

銀時と新八は互いに顔を見合わせそう思った。

最近町内マラソンとか少なくてね？（後書き）

このマラソンネタは、かなり前の銀魂の次回予告に書いてあってそれを昨日思いついて書きま・・・・・・・・こんなこと書かなくていいか（・・・・・）

ストパーをした次の日に髪がフワツとなつてると床屋をパンチパーマにしたくな  
遅めのあけましておめでとつございます！

皆様の記憶には一ミクロンも残っていないと思いますがお久しぶり  
です！

溜都ですぶっ！！

神「何ちゃっかりお久しぶりで済ませてんだクソガキヤ！！ミクロ  
ンどころかこんなフワフワした小説形にすら残ってないネ！」

・・・・・・・・。

新「そーですよ、もうちょっとカッチリ作風作ってたら一ミクロン  
位は残ってたと思うのに神楽ちゃんの言う通り形すら覚えてもらえ  
てませんよ。」

・・・・・・・・。

銀「大体なー、タイトルもサブタイもフワフワだしオリキャラのキ  
ヤラもフワフワだし休載期間も五か月でなんかフワツとしてるし・  
・全てにおいてフワツフワなんだよオメーは！！五か月休むんだっ  
たらもう一月休んで半年にして来いバカヤロー！！」

・・・（ボソツ）フワツフワの頭してる奴に言われたかねエよ。

銀「んだとコラアアアア！！テメーもストパーかけたくせにすぐ  
頭フワツフワじゃねーかあ！！」

チッゲーよこれはアレだ、ストパーをかけても次の日学校に行つたときあんまピツチりだとなんかいかにもストパーかけてきましたみたいな感じになっちゃうから、少しフワツとなつた方が自然だろうが！！

銀「そーゆうテーマのセリフもフワツフワなんだよクソガキ！！」

新「最終的に何の話してんだこいつら・・・」

神「前書きの終わりのもフワフワアルな。」

ストパーをした次の日に髪がフワツとなつてると床屋をパンチパーマにしたくな  
チャチャチャチャチャーン、デーデデン！

軽快な音楽が流れてきたかと思うと、バラバラというやかましい音  
と共に、ヘリコプターに乗ってマイクを構えた女性が画面に飛び込  
んできた。

『さあ始まりましたかぶき町マラソン大会！司会は私大江戸テレビ  
アナウンサー花野が務めさせていただきます！現在、江戸のかぶき  
町を超低空飛行で飛んでゲストの央国星のバ……ハタ皇子にお  
話を聞きながら中継したいと思います！』

カメラが花野アナから隣に座っているぼっちゃり体系に頭から触角  
をはやしている生物、ハタに向ける。

花野アナもマイクをハタに向ける。

『それではバ……ハタ皇子、この若干ウザ目のチラシを見ると優

勝者には時価三十万円の卵が贈られると書いてありますが、何で卵なのでしょうか？」

「いや・・・余、別にコメディアンでも卵評論家でもないからね、呼ぶんだったら動物が出る番組に――。」

「ありがとうございますバ・・・ハタ皇子。」

ハタの言葉を途中で切る花野アナ。

「聞いたって無視するでない。しかもさっきからバカ皇子って言いつつになってるよね、ヘリコプターから突き落とされてーのかぬし。」

ゴチャゴチャ言うハタから花野アナへとカメラを移す。本当ならば音声処理をしてハタの部分だけを切り取りたいところだが、生中継なのでそうもいかない。

『失礼しましたバカ皇子。そして気になる部分があと二つあるので  
すが、一つ目は、チラシには命の危険にあってもかぶき町は一切の  
責任を負わないそうです。これは命の危険があると言っているとい  
う事なのでしょうか？』

『てめっ、ついに言ったな、全然失礼しましたじゃないじゃん。先  
生に怒られたときに先生のツラを取りながら謝るような暴挙じゃん。』

若干、というかキレ気味の一星の皇子を、眉一つ動かさずにあしら  
う花野アナはさすがプロだ。

『さて、そろそろ読者も私たちの話に飽きてきたころだと思いま  
すので、最後の質問をしたいと思います。このマラソンは男女混合な  
のですが、ハンデと言う物はあるのでしょうか？』

『余が知る訳ねーだろンなもん！別に余じゃなくてもいいじゃん！  
町内会に聞けよボケ共があー！！』

いよいよハタが血行の悪い顔を真つ赤にしてキレ始めたとき、ヘリコプターの騒音に負けず劣らずの悲鳴が地上から聞こえた。

カメラマンと花野アナが反応してヘリコプターのドアに身を乗り出す。地上には、悲鳴と花野アナの質問の答えがあった。

「「うぎゃアアアアア！！！助けてくれエエエ！！」」

地面を這うように逃げる男達に、女物の着物を着た、眼鏡を割られても女ではないことがわかる奴らが立ちふさがる。

「いや〜ん、逃がさないわよボウヤ達イ」

ほかの奴らに比べて頭一つ分くらい大きい者が、ズイと前に出る。  
太い声に、吐き気を誘うような気色の悪い言葉。その人物は江戸で  
も有名な……

『西郷さんです！！かぶき町四天王の一人にして「カマッ娘クラブ」  
の店主、「鬼神 マドマーゼル西郷」です！！西郷さんとそのほか  
のオカマたちが男性を次々にカマッ娘クラブに拉致していきます！  
まさに地獄絵図！化け物が人間を冥途に連れて行っているようにし  
か見えません！男性達の表情も心なしに隣にいるハタ皇子のようにな  
っております！！』

『オイてめー余の顔が紫色だって言いてーのか、読者に分かりにく  
い言い方すんじゃないやねーよ読者と余に謝りたもね。』

『ハタ皇子、役に立ってんだか立ってないんだかわからない補足、  
ありがとうございます。』

花野アナと意外に読者に優しくかったハタが言い合いをしてるうちに  
も男達がどんどんカマッ娘クラブののれんと言う地獄のゲートをく

ぐっっている。

オカマたちは女には見向きもしない。女達もオカマに連れて行かれる男達に何故か見向きもしない。

『ハンデとはこういった事なんでしょうね、それにしてもハンデが大きすぎるような気がするのは私だけでしょうか！？』

そのとき、堂々と道の真ん中を歩く異様な五人が花野アナの目に止まった。

五人の中二人は正真正銘の女なのだが、怪しい者が三人いる。

一人は真っ白なパーマを二つに結んでいる者。

一人は短い髪に前髪だけを結ったメガネっ娘。

そしてもう一人はちゃんまげのように髪を結った小柄な者。

『いや、完全に男三人混ざってますよ！アレ絶対男ですよ！！』

花野アナが、訴えるように五人を指差していると、地上から声が聞こえた。

「いやねえ、男だって、見るからに女でしょ、ねえパー子。」

金髪の真正正銘の女が、骨格があらかさまに男なパーマツインターに話を振る。

「そうよそうよ、ちょっと遠いから見間違えてんじゃないの？」

『間違えるわけねーだろニキ口先にいても分かるわ！！』

全員花野アナの声を聞こえない振り。

「アラ？上からギャアギャアうるさい奴がいるネ。レイ子！やっちやってヨ」

「了！解！」

チャイナ風な少女にレイ子と呼ばれた女装した少年はベルトから銃を抜くと前を見たまま引き金を引いた。

パキヨン！という音がして、少年の銃から発射された針がヘリコプターのプロペラに突き刺さった。プロペラは針を巻き込んで当然のごとく止まる。

『えっ、ウソッ、止まった！？止まっちゃった！？』

花野アナが空しく叫ぶ中、無言になったヘリコプターは真っ逆さまに落ちて行く。

『ギヤアアアアアア！！！！！』

「あつ、ママ！アレ、パー子じゃない？」

一人のオカマがやつと異様な五人に気付く。

「げっ、逃げっぞテメーら！」

パー子が、声を男の声色に戻し、女物の着物を脱ぎ捨てる。ほかの二人も着物を脱ぎ捨てる。すると、女物の着物の下に着ていた万事屋メンバー（一人違うけど）の服装が現れた。

「チツ、何でバレたんじゃるか？」

「いや今までが奇跡過ぎただけだから。」

そして全員が逃げるように全力でダッシュする。

「ママア！あいつら逃げたわ！！」

「オメエら！一人たりとも逃がすんじゃないよ！！」

オカマたちもワラワラと五人を追う。

『あつ、異様な五人・・・というか三人が変装を解きました！アレツ  
！？一人真選組隊服です！一人真選組です！！つかテメーらぜっ  
て！弁償させてやつからなアアア！！』

花野アナの怒鳴り声が合図だったかのように、遠くの方でドカーン  
！という音と共に黒い煙が上がった。

ストパーをした次の日に髪がフワツとなつてると床屋をパンチパーマにしたくなアレツ？またフワツとした感じで終わってしまったよ……

銀「しかも新年一発目がマラソンって何なんだよ、なんでそんなとこまでフワツとしてんの？」

毎回思い付きなんだって、コミックス十五巻の「空知の読者とふれ合う質問コーナー？」見て思いついたんですよ。

銀「いやそこまで細かく聞いてねーよ。」

そんなこんなでこれからもフワフワやっていきますんでよろしくお願ひします！！

最後に、感想くださアアアい！！

## 悪いことするとまわりまわって帰ってくる（前書き）

前回、新年一発目なのに花野アナとハタ皇子しかあんまし出なかったっていう感じになっちゃって、自分でもびっくりです。

ホントは二話完結にしたかったんですよ、私の物語構成の下手さがにじみ出ていました。

今回で終わっかな・・・（――；）

ちなみに今日はコミックス十八巻、マダオの中に住む超気がはえエハイジの誕生日でした。

ハイジ、おめでとう！

悪いことするとまわりまわって帰ってくる

オカマたちを振り払ってマラソン大会も中盤に差し掛かった頃、銀時が口を開いた。

「なっげーよ！いつまでやんだよもう三回目だぞ！夏とか言ってるけどバリバリ冬だっつーのチクショー！！」

正直その辺は触れないでもらいたい。

「誰に言ってるんですか銀さん、確かに誰が読むんだって感じのグダグダですけど、作者も今回で終わらすって言ってんで頑張ってくださいよ。」

新八がなだめても銀時のグチは止まらない。

「大体何でマラソンなんだよバカヤロー！！もっとシリアスでカッケーのやりてーよ銀さん！」

グダグダと言う銀時に七はうつうつしそくに耳を塞ぐ。

「うるさいなー銀は、昔の髪も会話もサラッサラだった銀はどこに行っただよー。」

「最初<sup>ハナ</sup>っからいねえよそんな銀！」

七の言葉にやぐされ度がました銀時。そのときふと、一番前を走っていた神楽が足を止める。

「何じゃ？ウ○コか？急に止まりよって。」

「レディに気安くウ○コと言ってんじゃないネチヨンマゲ。」

「いやそれおまんも結果的にウ○コいつちよる。」

神楽は玲翔の質問に眉を顰めるが逆に玲翔に突っ込まれる。神楽はまあいいアルと言いだの先を指差す。

皆が指の先を視線で追うと、またもや道をふさぐ者が。

ドラム缶に手足と頭が生えたようなゴツイからくり。それはまさしく江戸一番のからくり技師、「平賀 源外」が作ったからくりだった。

「え？何？町内会のババア共は何がしたいの？かぶき町人類撲滅計画？」

口調は穏やかだが、銀時の額には青筋が浮いている。だがからくりは銀時の疑問に答える訳もなく腕を振り上げた。

「いつちよる場合か！」

玲翔はベルトから銃を引き抜いてからくりに向けて撃つ。しかし、銃から飛び出した針はからくりにあたるとカキン！と音を立てて跳ねかえった。

「ぬおっ！硬っ！！」

からくりはそのままズシン、ズシン、と音を立てて近づいてる。

「ギヤアアア！こつち来ますよ！！」

新八の叫び声で皆横に跳んで逃げるが一人、その場にとっ立っている者がいる。

「セア！！てめっ何やってんだ！死にてーのか！？別に死ぬならそれでいいけどホントに死ぬぞ！！」

一人突っ立っている七に銀時が言うが七には届いていない。

銀時はまた七に声を掛けようとするが、七の表情を見たとき、声をかけるのをやめた。

「どーしたアルカ銀ちゃん？」

神楽の質問に、銀時は右手をヒラヒラと振る。

「ダメだありゃア、あーゆう顔してっときのアイツは何言ってもムダだ。ほっとこーぜ、」

「ほっとくってアレ……」

いいんですか？というように新八は呆れた目で七を見る。

七の表情、それは子供のようなはじける笑顔。

キラキラといっそう輝いた瞳。

七は楽しそうにからくりに向かって歩みを進めた。

カランコロンと下駄がリズムカルに音を立てる。

そして、七とからくりがスツとすれ違った時、からくりの動きが一瞬止まった。

七はそのままからくりを通り過ぎて歩く。

一瞬だけ止まったからくりは、またすぐ動きだし自分の後ろにいる、一標的（七）に向かって体の向きを変える。

そのとき、七の歩がピタリと止まる。それと同時にからくりの動きも止まる。

今度は一瞬ではなく、止まったまま、からくりの胴にピシッとひびが入ったかと思うと、派手な音が立ちからくりの胴が真つ二つに斬

れる。

からくりの斬れた胴の上の方がどしんとずり落ちたとき、七が振り向いた。

「あーあ、もう終わっちゃった。」

その表情は、お気に入りの玩具が壊れてしまった、とても残念そうな表情だった。

「な、言ったるムダだって。」

銀時はそういつと七に向かって歩く。

「スゲーアル!!!七姉!!!」

神楽も七に駆け寄る。

新八は自分の顔から血の気がスツと引いていくのを感じた。

「何つつたつちよるがかメガネ、さっさと行くぜよ。」

玲翔は新八をひょいと抜かして走り出す。

新八も走り出そうとしたが、後ろからブウンという音がして後ろを振り返った。見ると、一台のパトカーが自分に向かって猛スピード

で走ってくるではないか。

「ウギヤアアアア!」

新八は思わず身構えたが、パトカーはきれいに新八を避けて、前を走っていた玲翔を轢<sup>ひ</sup>こうとしていた。

「玲翔くん! 後ろオオオオオ!」

新八の声に気付いた玲翔は、間髪<sup>まが</sup>髪上に跳んで避ける。

パトカーは狙いが外れて急ブレーキで止まる。

銀時もパトカーの止まった騒音で後ろを振り返った。

「何だア? あの暴走パトカー?」

すると、パトカーの運転席の戸が開き、中から、無造作に切った黒髪にくわえタバコ。そして玲翔と同じ真選組の隊服をきた人物が降りてきた。

「げっ……土方さん。」

玲翔の表情が一瞬で嫌そうになる。

黒髪の男、土方は玲翔の百倍不機嫌な顔で玲翔のことを睨む。

「よオ玲、俺が何でここににいるか分かるか？」

そう聞くと、玲翔の表情がホッとしたようにゆるむ。

「なんじゃ、土方さんもさぼりじゃったんか。」

「ちげえエエエエエエエエよ！！！！お前この流れでよく言えたな！！」

今まで抑えてきた怒りが爆発したように、土方は玲翔に怒鳴り散らした。

「おいおい、どんな運転の仕方してんだ、ココはF1会場じゃねーんだよ腐れポリ公が。」

いつものように銀時は土方に突っかかる。

「だまれ、腐ってんのはお前の頭だろクソ天パー。今お前にかまってる暇じゃねーんだよ、俺は玲翔<sup>コイツ</sup>回収しに來ただけだ。」

土方は銀時の方を見ようとしないで、玲翔のちょんまげに結っている髪を引っ張って連行していく。

「いだだだだだ！ハゲるっ！この年でハゲる！」

玲翔は目で銀時に助けをもとめるが、銀時は無視。目が「自業自得」と言っている。

暴れる玲翔を乗せたパトカーは、やかましいエンジン音を立てて風のように去って行った。

「銀さん、一人消えましたね。」

「あア、後はあの女<sup>アマ</sup>二人だな。」

（（お前を蹴落とすのはその後だ！！））

会話の裏で互いに同じことを考えていた二人の顔は、鍋を取り合った回のようにとても腹黒い顔だった。

ゴールがもう見えた時だった。スナックお登勢の前を通り過ぎようとしたとき、店の戸が勢いよく開き、黒い着物を着た老婆が歳を感じさせない飛び蹴りを放ってきた。

「家賃払いやがれダメ人間がアアアアアアア！！！！」

「うおおおおっ！！！！」

紙一重で避ける銀時。老婆、スナックお登勢の店主のお登勢はそのままスタツと着地すると、指をゴキゴキと鳴らす。

「てめーコノヤロ、今日こそたまった家賃耳揃えて返してもらおうよ  
！！」

鬼のような形相のお登勢に全員がたじろぐ。新八はその時、銀時の瞳が珍しくギラリと光ったのを見た。

「うおらァー！！」

銀時はお登勢のいる方向に新八を蹴り飛ばした。

「ぐほオー！！」

蹴り飛ばされた新八はお登勢に避けられたので、地面に思いつきり頭から激突した。

お登勢が新八に気を取られた隙に三人は思いつきり逃げる。

「ギャハハハハハ！卵売った金は俺のもんだ！！」

銀時はついそう言ってしまってハッと口を押さえる。だが時すでに遅し。

「銀時くゝん……………」

「『売った金』って何アルか？」

妙に明るい声が背後から聞こえて恐る恐る振り向くと、もう二人の足が銀時の顔面無我って飛んできていた。

バキッ!!

「ギヤアアアア!!」

銀時は低空飛行のジェット機のように凄いスピードで飛んでいく。

そして

そのままゴールテープを切った。

「「あ、蹴る方向間違えた。」」

二人の言葉もむなしくいつの間にかゴールテープ前にいた花野アナ

のマイク越しの声が響く。

『ゴーーーーール……！……ゴールしたのは銀髪の男性です……！』

「何かよく分からねエが金は俺のモンだ……！」

銀時は頭から血をボタボタとたらしながらガッツポーズを取る。

『それではスナックすまいるの志村妙さんから賞品を贈呈してまいります。』

「……………え？」

銀時はとてつもなく嫌な予感がした。頭にたれている血も引いて行

っている様な気がする。

「銀さん、おめでとございます。でも手間がかからないように私が卵焼きを作っておきましたからね、」

予感は当たってしまった。

今なら競馬の予想も当たるかと思っていられたのは少しの間だった。

「七ア！！神楽ア！！」

助けを求めるが、二人は振り向きもせず万事屋に帰っていく。足早に。

「し、新八！」

「あつ、お登勢さん！僕お店手伝いますよ。」

新八すらもスナックお登勢に消えていく。

「どうしたんですか銀さん、早く食べないとさめちゃいますよ。」

妙は笑顔で重箱に入った未確認物体ダークマターを差し出している。

「誰かつ！誰か助けてくれエエエエエ！！」

江戸の空に、悲痛な叫び声が響いた。



悪いことするとまわりまわって帰ってくる（後書き）

オチは卵が出てきた時点で何となくわかりましたよね。

ってことで何を書きたかったのか分かんないマラソン大会でした（  
。―。＜）

そろそろシリアス書きたいなア・・・

感想もらえるとホント嬉しいです。

## 嵐が来る前には必ず何かがある（前書き）

ってことで次からシリアスな感じで行こー的なことを考えています。  
お気に入り登録も三件から六件を行ったり来たりしてるオメーがシリアスなんて書けんのか？と言う疑問をお持ちでしょうがやれるだけやってみます。

たまにはシリアスな七ちゃんを書かなきゃな、バカなだけじゃないんだよってことを書かなきゃな。まあ基本バカだけど・・・

七ちゃんがシリアス路線をバズーカで破壊して脱線しないかが一番心配です。

そして私の文章構成能力の無さも心配です。

今年は駄作作り機から脱皮したいな！（願望）

嵐が来る前には必ず何かがある

三日月が淡く輝く静かな夜。

街灯の光を反射して、夜の真っ黒な川に周りの景色がそっくりそのまま映る。

まるで川に違う世界があつて、川に落ちでもしてしまったら、その世界に吸い込まれてしまいそうだ。

だが、川が静かに映していた景色が揺らぐ。

川に浮いていた屋形船が、ゆっくりと動き出したのだ。

「今日の月は、またずいぶんと弱エ光だな。」

屋形船の窓によりかかった男は呟く。

「せつかく地球<sup>こち</sup>に戻って来たっつーのに、こんなに暗エんじや宇宙<sup>あうち</sup>と変わりやアしねエな。」

女物のような鮮やかな着流しに、左目に巻いた痛々しい包帯。

手に持った煙管からは、ユラリユラリと煙が天上がってゆく。

包帯で巻いていない、獣のような光りを持つ右目は細い月を眺めている。

「どこに行こうと変わりはしないでござるよ晋助。それは幕府を倒そうと同じ。」

屋形船の中で胡坐をかいて三味線を弾いている男がいう。

耳にしている大きめのヘッドフォンに逆立たせた黒髪と言う姿は今の風の若者のようだが、サングラスで見えない彼の眼も、先ほど彼が晋助と呼んだ男と同じなのだろう。

「万斉、俺ア幕府を倒すなんつーチンケなことにやア興味はねエ。言つたろう・・・俺アただ壊すだけだ。この腐った世界を・・・」

晋助という男の言葉に、万斉という男はサングラスでは分からないが、三味線から晋助という男に視線を移すように顔を上げた。

「・・・拙者らはただぬしについて行くだけでござる。作戦の決行は一週間後、良いか。」

「あア。」

万斉は、晋助の短い返事を聞くと三味線を背中に背負って立ち上がる。

それと同時に船のかすかな振動が止まる。

万斉は、船の出口に向かって歩き出す。

だが、出口のところでピタリと止まると振り返る。

「晋助、風のうわさではあの「舞姫」が江戸にいるとのことでごさる。良いのか？まだ仲たがいでいない戦友は、確認できるだけ坂本と舞姫だけで——。」

「万斉」

晋助が万斉の言葉を遮る。

「確かじゃねエ話だ。関係ねエ。それに俺ア今も昔もあのバカ女は大嫌いなんだよ。」

そういう晋助は月を睨んだように見えた。

もうすぐ新月だが、細い月は今にも闇に消えてそうだった。

まるで今から起こることから隠れるように。

嵐が来る前には必ず何かがある（後書き）

明日はまた子ちゃんと言輪さんの誕生日です（^v^）

鬼兵隊の人の誕生日から始まります！（多分）

ピ○ミンが死んだときの声はとてつもない罪悪感に襲われる（前書き）

また子さん日輪さん誕生日オメデトー！！

また子さんのゝッスって何かいいッスよね（＾Ｏ＾）

話は変わりますがホントにピ○ミンが死ぬ時の声って罪悪感がハンパないんですよ、

お前の死は無駄にしないぞ赤105号オオオ！！、俺の投げ方が下手でごめんなア！！みたいなですね、一回オ○マー一人でボス倒しに行ったことありますね。

うおらア！！死ね怪物がアアア！！と、まあボロ負けしましたけどね・・・・。今度はル○イで行ってみようかな・・・・。

ピ〇ミンが死んだときの声はとてつもない罪悪感に襲われる

ここ最近、江戸は静かだった。

攘夷浪士によるテロ活動もなく、目立ったニュースと言えば、どこぞのバカ皇子のペットが逃げ出したという事だけだった。

スナックお登勢の二階にある「万事屋銀ちゃん」も、いつものごとく依頼もなく静かだった。

「……………なーんか最近よオ、静かすぎやしねーか？ジャンプは先週合併号出たから売ってねーし、依頼もねーし。」

先週のジャンプを永遠と読み返していた銀時が、つまらなそうに自分愛用の社長椅子にのけぞる。

「つまないアル。テレビもアナウンサーが離婚したーとかお笑い  
げーにんが離婚したーとかあの歌手が離婚したーとかしか言わない  
ネ。」

「いやあの歌手って何だよ。」

「オイオイ新ハイ、ツツコミがいまいちヨ。そこは「離婚ばっかじ  
やねーかアアアアア！」位言うアル、何どーでもいーとこでツツ  
コンでるアルか？だからオメーは新一どころか新二にもなれねーん  
だヨダメガネ。」

「何だア！！何でそんなガチでダメだしされなきゃいけねーんだよ、  
ツツコミできたって新一になれるわけじゃねーんだよバツキャロー  
！！！」

ダメだしされたのが恥ずかしいのか、バカにされて頭に来てんのか、  
新八は顔を真っ赤にしながらツツコむ。

「あーあ、ジャンプは売ってねーし新八のツッコミのキレは悪いしホントつまんねーな！」

「悪かったな、キレが悪くて。」

銀時と神楽のストレスの矛先が新八に向かい始めていたとき、先々週のジャンプをパラパラとめくっていた七がふいに口を開いた。

「何かが来るかもよ、」

「はア？いきなり何言っただテメーは、」

銀時がのけぞっていた体制から戻る。ギツと椅子がきしんだ。

「嵐の前の静けさ」って言うじゃん、浪士達も何かを察知して石の下に隠れてるんじゃないのかなーって思うんだよ。」

七は相変わらずジャンプに目を通したままだ。

「アツ子が大江戸テレビに乗り込んでくるアルか？」

「いんや、例えばおっきな事件とかさ、」

「怖いこと言わないで下さいよ七さん。なんでそー思ったんですか？」

新八が嫌そうな顔をして聞くと、七は右手をヒラヒラと振る。

「女の勘ってやつだよ、ぱつつぁん。」

「何が女の勘だバカヤロ！。獣の勘だろーがよ、オメーの場合。」

銀時がケツと毒づいたとき、ピンポンとチャイムが鳴った。

「はい」と新八が玄関に向かう。だが玄関がガラガラと開いた音がしたと思ったらスパン！と勢いよく戸を閉めた音がし、新八が真っ青な顔で居間に転がり込んできた。

「何だ？ババアが家賃回収にでも来たか？」

「イヤ、なっ、何でもない違う違う違う……。」

銀時の問いに、新八は自分に言い聞かせるようにブツブツと呟く。

すると、新八の背後から声が聞こえる。

「あのー……………すいません……………」

細い女の声。

ボサボサの長い髪に隠れた青白い顔に白い着物の女を見たとき、銀時と新八は言葉にならない声を上げた。

「「＃\$&%’”！＃○　　}}}}！！！！」」

「すみません……驚かせてしまって……」

「いやいや何がア！？全然驚いてねーし！そりゃこっちのメガネはちびりそうになってたけど俺はちげーから！！」

「ちびりそうになんてなつてねーし！！テメーだって大人げなく椅子から転げ落ちてたじゃねーか！！」

大人げなく怒鳴り合う二人。

「おばちゃん、依頼アルか？」

神楽が無邪気に聞くと、白い着物の女は小さくうなずいた。

「実は最近……変な影をよく見るの。」

「それはアレじゃねーか？自分の姿を鏡で見たとか、」

「毎晩夜になると、いつもは誰も通らない道に何かが通って私の家の障子に影が映るの……。」

「それは多分あなた自身ではないのしょーか！..」

「だから……私毎晩毎晩寝られなくて……お願いします、」

影の正体を突き止めてください。」

「そうですか、だからこんな姿に——！！」

ゴリユッ！っという音がして、ちょこちょこ失礼なことをはさむ銀時は自分の踏まれた足をおさえてうずくまる。

足を踏んだ当の本人は相変わらぬ笑顔で白い着物の女の話をしている。

「分かりました、それでは今日の夜お家に伺いますね。」

「………よろしくお願いします。」

白い着物の女が帰った後、銀時は盛大に怒鳴り散らした。

「じょーだんじゃねエ！！俺ア行かねーぞ！！行くんならオメーらだけで行って来いオメーらだけで！！」

駄々をこねる銀時に三人は銀時に聞こえる音量でコソコソと話す。

「アレッ、もしかして怖いのかな銀くんは？」

ピクツと銀時の耳が動く。

「もしかしてじゃなくても怖いんですよあのテンパーは、仙望郷の時もビビり倒してましたから。」

銀時の額にピクピクと青筋が浮かび出す。

「情けないアル。友達ん家のチャイム緊張して押せない小学生より情けないアル。今どきスマホどころか普通のケータイも使いこなせない奴より情けないアル。ジェットコースター渋って彼女だけ乗らす男より――」。

「うるセエエエエ！！！！行つてやらア！！行けばいいんだろ！！別に怖くないけどオ！！ちよつと腹の調子が悪かったただけけどオ！！そんなに言つなら行つてやるよコノヤロオオオオオ！！！！」

銀時はこの時の言動を後で深く後悔することになるのだが、それはまだ知らない。

ピ〇ミンが死んだときの声はとてつもない罪悪感に襲われる（後書き）

なかなか話が進みませんね（^ー^；）

感想くれたらとっても嬉しい――。

銀「しつけーんだよっ！！どんだけ感想ほしーんだよオメーは！！  
人気がねーのはテメーの責任だろーが！！」

人気がないのは分かるけどっ！感想もらうと死ぬほど嬉しいーんだよ  
！！明日も頑張ろうってなるんだよ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5516t/>

---

ノーテンキな奴ほど何か強い

2012年1月8日18時51分発行